

三河記

大沢

衛の記おく

頃は文政の十二秋の八のすへ、四方の空長閑にて

秋も八ツの三九(二十七日)の日、君命によつて三陽(三州)矢作江発足

の、けふの日柄も吉日と、旅の門ト出の仕合よしと

目出度帰り下谷の住家を立ツ出、潮(うしを)の朝日や高

縄手、実(げに)も東都の海の面おだやかなりし、御定目

札の辻にて待合せ、爰で五人か大仏、仏も元ハ(凡)ぼん

ふ(夫)のこゝろ、八ツ山沖の鶉(かもめ)さへ、つがへ放れツ二人りツ、並ん

で居るハ古風なり、今ハ衣裳(もつそう)を着飾(きかざり)て、姿も

しやんと品川や、花をならべし御殿山、近くは

*衛―ドウ、みち、道の古字。

*文政十二年秋の八―1829年八月は大の月30日まである。時の天皇は仁孝天皇、將軍は十一代徳川家斉である。

*高縄―東京高輪

*御定目札―高札

*姿もしやんと品川や―品川宿、東海道五十三次の第一。薩摩藩士・僧の出入り得名高い遊里として賑わった。
*花をならべし御殿山―御殿山、東京都北区西原の台地、徳川家光の御殿が置かれていた。寛文年間、吉野桜が移され、桜の名所となった。
*品川近くにも「御殿山」があったようである。

あらぬ東海寺、遙はるかに見送り北品川、みんな見立の

忝かたじけ(な腕)や、あら有ありがたや観音前、鍵屋が座敷、打晴て

海漫々たる青海原、江原ばらく松の風、松

木は常盤の色添て、九歳後の旅路にも、同じ

別わかれの名残おしくも是非もなく、いざさらば

随分堅固けんこでおまめでと、見送り見帰(返)り立別レ

品川寺(へほんせんじ)の観音をふしおがみてかくなん

ものゝふの矢作の橋のすくなれと

知恵ちの矢いを矧はがし誓ちかへひ頼たのて

*東海寺—臨濟宗大徳寺派、山号は万松山、徳川家光創建、開山は沢庵宗彭。

*江原—荏原、多摩川下流の北岸から東京湾に面する地域、品川区西部の地名。

*品川寺の観音—海照山品川寺普門院水月観音のこと。

*知恵ちい・誓ちかへ—江戸っ子の口くせ、「え・へ」↓「い・ひ」となる。

さア是からの気さんじハ、きせるくわひてがた／＼
 ぎし／＼と、爰で火打を海安寺、紅葉染なす
 毛氈もうせんハ、乗懸のりかけ四ツでゑひさゝさ、水の茶やを出放て
 まつの葉越しに桃ももさくら、垣間かきまにもるゝ山吹の
 風にちら／＼ちる如く、軽尻馬の鈴ヶ森、から／＼
 ぴい／＼風車、麦藁わら細工、和中散さん、大森過てミやう（夫婦）
 とばし（橋）、久敷添ル新ン宿か、よつ程古川薬師道、
 新田の社はるか西、爰ハ六郷舟渡し、川を越れハ
 川崎宿、大師河原ハ左の路、堅固で帰府を祈りいのりツ、
 名代のなら茶みセ万歳が興のてい、ちよいと一盃かた
 むけんと打通ル、扱包丁ほうちやうの手きいて、切り目たゞ敷

*気さんじ—気散じ、気晴らし。

*海安寺—海晏寺、品川区に有る曹洞宗の寺、山号は補陀落山、江戸時代は紅葉の名所。

*乗懸—江戸時代、道中馬の両側に明荷（あけに）二個を渡して其の上に布団を敷いて人が乗ること。

*—軽尻馬—からじり馬

*鈴ヶ森—品川区大井二・三丁目一帯の旧地名、江戸時代には東海道沿いに刑場が置かれていた。

*和中散—時効たりや風邪等に効能があるとして諸国に流布した薬、大森に三軒店を並べて売っていたのが有名。

*みやうとはし—夫婦橋

*川崎大師—新義真言宗智山派の寺、金剛山平間（へいげん）寺の通称。大治年間平間兼乗父子が弘法大師像を海中から拾い、尊賢を開山に創建。厄除大師として有名。

焼豆腐、露^{ふき}ハ葉もひろく、命長芋^{ちりめん}縮^{ちりめん}緬^{ちりめん}麩^{ちりめん}
 武士のふの字と誉られて、もふ一チセンと椎^{しい}たけ
 やぢんぼり、尻をふり廻し、下女が配膳酒肴、コレ女
 性そもじのお名ハ何といふ、ハイお亀と申ます、ム、
 よい名じゃ、先年某勢州江登ル時も爰でやす
 みし時の女子ハ、たしかお鶴と言しが、そさまは
 お亀、かふ発足の二度の休ミの其時に、目出度思ひ
 待^(侍)ルなりニアよい器量、柳の腰にハほしけれど
 大木柳のこしふとく、丹花のくちびる、ほう高く
 鼻^{イタツ}至^{ヒクシ}て低し、手も足もよふふとつてじゃ、中く
 公家高家の御息女にも、そさまのよふな大きな尻
 ハあるまい、とたわむれ侍りて

*そもじ—対象、主として女性が対等または召目下に対して用いた。あなた、おまえ。

*丹花のくちびる—赤い花のようなくちびる。

先年は お鶴なりけり 万年屋

今はお亀が 尻のふつたり

御暇申と立出れハ、又お下りに誉ておくんなさい

まし さやうなら御機嫌よふとお亀が挨拶、爰ハ鶴見の

よねまんぢう、うまい所を打過て、麦ママなま

村でも焚て喰、飯盛女とさがなくも、口で言れ

ぬ恋の介、思ひまいらせ神奈川の、宿の中バに

おきの方、紀伊国屋 江こそ着にけり

けふは八月廿八日、神奈川の宿立出、臺(うてな)の茶屋
 沖を遙に見渡セハ、出船入船釣小船、西に山く
 本牧の、ほんに余所にハあら不思議、富士の人穴右ニ
 あり、仁田の四郎が這入しハ此穴にてハあらずやと
 いふ、程なくつくや程ヶ谷の駅、権太の坂や焼餅坂とハ
 このもしい、爰ハ武蔵と相模なる境の杭に信濃
 坂、とづかハ急くきん玉の戸塚の宿、松原過て
 原といふ立場(たてば)の小花陰之間の里を越れば鎌倉
 道、正八幡を遙に拝し、さあく早く遊行寺
 清浄光寺とも(申す)ふすなり、一篇(編)上人開基の寺
 小栗の墓所も苔むす塚に名をとゞむ、左り(ママ)の

*臺(うてな)—四方を眺めわたすために
 土を積み重ねて作った壇。

*本牧—横浜市本牧町

*富士の人穴—人穴(ひとあな)、火山の麓
 などにある洞穴。溶岩穴、昔ひとが住ん
 だという。

*仁田の四郎—仁田忠常のこと、平安・鎌
 倉前期の武士、仁田四郎と称す。建仁二
 年(1103)源頼家の駿河での狩の際、頼
 家の命で富士山麓の人穴を探検。曾我兄
 弟を討ったひと。

*立場(たてば)—建場とも、宿場宿場の
 間の街道などで人夫が杖を立て駕籠や荷
 物をおろして休息したところ。

*遊行寺(ゆぎょうじ)—藤沢市に有る時
 宗の総本山。清浄光寺の異称。

*小栗の墓所—小栗満重の子小次郎と照天
 (てるて)姫の伝説(詳しくは東海道名所
 図会下巻を参照)。

方に江の島道、弁財天をふし拝ミ、是も弁才てんと、よい宿の茶屋の女のよびこむ声も、まだ江戸まじりの声もあり、藤沢宿を開放て、右に白箕はた大明神、義経の首納たる所を祭し宮と聞ク彼の弁慶けいが首塚ハ、是よりわつか二三丁、四ッ谷といへる立場より、大山道に打向ひ、武運長久そくさいと、祈しの声も木幡の里、馬士が小唄の高砂やあれ江の島の姥が里、老の姿のたよくと、白髪大根アイ鯉キスの鱠キレイ、奇麗な茶やでいざ昼飯、名代南ン郷酒もよし、飯もたきたて湯げが立ッ、辰巳上りの茶屋女、膳も取れぬにもふ算用、三五十八廿にはなるやならずであしらいも、勘定つくも

*白旗大明神―藤沢市藤沢の鎮守、白旗明神社、源義経の霊を祀り、近くに義経の首を埋めたと伝える塚がある。

*鯉(アイ)―ひしこ、片口鰯の古名。
 *鱣(キス)―なます。鱣残魚(きす) 鱣算魚(しらうお)。
 鯉の鱠ひしこのなます。
 *辰巳上りの―かん高い調子はずれの声で話すこと。

*勘定つく―勘定づく、打算的なこと。

手ばしかく、メテなんこでこざんすと、いふて代を
バとり納メ、ひんしやんとして入りにけり

甘い酔て 喰へぬなんごの 茶屋女

鯉になしたる 取廻しなり

いざ参らふと立出ル、かごよりかほゝ出しツ、ニアく

ちつと町屋はし、鶴峯八幡右にあり

馬入(ばにゆう)の川の船渡し越て、八幡の立場過き、平塚

宿のたいらかに、少し登ル化粧坂(けわいざか)、名に大磯の

宿の中、こなたにあるハ虎が石、とら子石とも夕

暮の、秋の景色を詠たるハ、此宿はづれ、右かの

方、山本屋にぞ着にけり

*馬入の川―馬入川、相模川のこと。

*化粧坂―鎌倉市扇谷の西方の坂。鎌倉七口の一つ。新田義貞の鎌倉攻めの入り口となる。

*虎が石―神奈川県大磯町の延台寺番神堂にある石。重さ145キロ、曾我十郎祐成が遊女虎御前のもとに通う夜、賊の矢を防いだため、十郎の身代わり石といわれ、美男しか持ち上げられないという。

けふハ八月廿九日、朝も早めにたち出て、同じ宿ナル鳴立沢(しぎ)の物さひて、庵も殊勝シヨウウシに桑門髪際キワ残りし墨衣、数珠つまくつて立出ルノウ〈御僧、西行の像、御宝物も拝したく、頼ミ申と立寄て、ひんね遅紙ヂの一ト筋に、ころりと亭坊承知して、しかつめらしく開帳す、こなたにたゝせ給ふハ西行法師のみかけてこさる、門(文)学(覚)上人鉦造りの尊像なり、近ふ寄て拝イあられませう、げにも面躰しほらしく、古き作と見へにけり、又あたりの堂を開扉して、こなたにましますハ大磯の虎御前さま、十郎様に御別れなされ候を、おしませ給ふて、黒髪をおろさせ給ふ

*八月廿九日―八月三九の日(二十七日)に出立して三日目。

*桑門―僧侶

*つまくつて―つまぐつて―つま先で繰る。

*ひんねぢ紙―おひねり、洗米や銭を白紙に包んでひねったもの、本来は神仏に捧げるもの。

*虎御前さま―前頁の注を参照。

十八歳の御姿、近ふ寄て御縁を結ばれませふ
また、是なるハ虎御前さまの握り石と申て、十郎
さまを恋しからせたまいて、握りつぶさつせい
た石でござる、ミなの衆、結縁のために握らせ
られとて、柏餅のやうな石を出す、いやとも
いわれず握てみれば、替ル事もなく、たゞの石也
おかしきをやつところらへ、開帳終て、亭坊も
あ^へん^庵へまねき、西行の杖其外、堂上方の筆色
紙掛ものなそも種々見する、西行の杖、長サ
四尺余、跡先に計りふしあり、珍敷竹なり

西行の歌に

心なき 身にも哀ハ しられけり

鳴立沢の 秋の夕くれ

といゝしハ此処にハあらず、と人のいゝし也
此所ハ近き頃、三千風と云誹^俳人の住て、西行
の像を安置せしとぞ、又、虎の像ハ江戸新吉原
より作り納ルと言、誠に虎ハ貞賢の婦、祐成
亡して後、生者必滅のことハりを語り、尼になり
しとかや、後世のひと、斯のことく像を造り吊^弔ふ
も、貞心の徳なるらん、感すれば哀に思われ

西行の歌に題して

*心なき―新古今和歌集に、西行法師の歌としてあり、三夕の名歌の一つ。
『東海道名所図会』(以下名所図会)に「むかし西行上人東路行脚の時、このほとりの沢辺を通りたまうに、から秋の暮れの物淋しきに、鳴の立ち去りてなおも寂莫たる風情を感じ、詠みたまう……」とあり、そして「しかれば鳴立沢という所をさしたる名所はあらざるべし、後人この大磯・小磯の海浜をなぞらえいうなり」と書いている。
*三千風と云う俳人―小磯の路傍に鳴立庵(でんりゅうあん)という草庵を結ぶ、宝永年中(1704~11)のこと。

心なき 身にも哀ハ 虎御前

過行人の 跡の吊^(弔)ひ

時^{ウツ}移りたり、ちと小急きに 小磯の里、和田
義盛千畳敷、爰朝比奈が切り通し、六道
能化の地藏尊、娑^ウ婆^バの子供もとくろめて
とんほふ返りハ此のあたり、鴻^{カウ}の新^ン宿、梅沢
の鮫^{アン}鱈^{カウ}汁もしらぬのも、一ツ盃吸て千鳥足
ふらりくくと小ゆるぎの、浜ハ爰ぞと押切村
ふり切袂袖しか浦、足もかろく足柄道、本郎
祐信屋敷跡、曾我中村ハ是より右直ニハわづか

*和田義盛千畳敷―鎌倉時代前期の武将。相模国三浦郡和田に住した。『愚管抄』に「義盛左衛門ト云三浦ノ長者云々」とある。鎌倉由比ガ浜付近に和田一族滅亡の跡といわれる「和田塚」が残る。
*朝比奈が切り通し―鎌倉市と横浜市金沢区の間に通じるきり通し。
*六道能化―ろくどうのうけ、六道にあつて衆生を導くもの。地藏菩薩。
*六道―全ての衆生が生前の業因によつて生死を繰り返す六つの迷いの世界。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上
*鴻―こう、鳥「ひしくい(菱喰)」の異名。
*梅沢―神奈川県二宮町の地名、東海道に面し、江戸時代には多くの休み茶が並ぶ。

*こゆるぎ―少しゆらぐこと。小ゆるぎの磯―神奈川県大磯付近一帯の海岸。

*本郎祐信―曾我兄弟の養父。

廿丁、廻れば三里三ヶの荘、生所もしらす、宿もなき
 彼の山姥が秘ヒそう子の金時山のとつかと、伊豆の
 大島、海上に見ゆるハ佐川の歩マ行渡り、冬ハ土橋を掛
 渡す、御登なれハ右方、御下りなれハ左り(ママ)の方、ういろ
 う虎屋トウチン香、御存ないとハ申されまい、挑灯・塩から
 小田原宿、城主大久保加賀守ニて、拾壹万三拾石余領
 せらる、左りハあたみ海有り、惣門過て地藏堂、是か
 らなにおふ箱根山、深山おろしに風祭の里、長興
 山浄泰寺の山門ハ、三百余檀の石岩岐、石垣山ハ
 右の方、小田原陳(陣)ハ太閤カウの、御陳所なりと聞及、三枚
 橋を打渡り、早くも爰に早雲寺、北條五代の墓

*トウチン香―透頂香、葉の名。外郎(ういろう)をいう。小田原の名物。口中をさわやかにし、頭痛を去り痰(たん)をきるといわれる。
 *大久保加賀守―大久保忠朝、貞享三年(1686)正月、稲葉氏にかわって小田原藩に入部。十万三千石、子孫が明治まで続く。

*風祭―かざまつり―秋の収穫前に大風が吹くのをおそれ、風を静め豊作を祈る祭。

*小田原陣―天正十八年(1590)全国統一事業を進める豊臣秀吉が、関東の雄北条氏の本城小田原を攻めたときの秀吉の陣。
 *三枚橋―沼津宿を形成する町のひとつ。
 *早雲寺―箱根町にある臨濟宗の寺。金湯山。大永元年北條氏綱が父早雲の遺言により創建。

所あり、昔(ママ)し文亀二年の秋の頃、宗祇法師の此寺に
はかなき名のミ残りけり、扱めつらしき紅葉の
拾三間ニはびこりし、寺ハ小寺の正眼ン寺、爰も
立場か茶ト一ツ、湯本の町の挽ものミセ、見せては
買セ、にやおかさんも商なひ上手福住や、娘もよつ
ほどよい細工、先へ伊豆やもよい娘、むすめくと
沢山な中にハあ(あばた)ハた川端の、里を過れば畑の茶
や、お駕籠も爰に橘や、お大名にもしられたる、あや
かりものの茗荷やの、娘ハ梅花しらしほり、とろり
と付て油屋の、是も名取の娘たち、油こいのも打
交り、さアくお休なされませ、抑此畑と申ハ箱根山
の中腹にして谷間(あ)イの一ト色茶屋か、我居も物数

*宗祇法師—飯尾宗祇(いのおそうぎ)室町時代の連歌師。文正元年(1466)に關東へ下り、戦乱中(応仁の乱)は主として關東にあり、各地を歴遊。門人宗長ともなつて駿河へ向かう途中、文亀二年(1502)七月三十日、箱根湯元の旅宿に没した。八十二歳。遺骸は足柄山の麓の定輪寺に埋葬された。

寄に女子も奇麗に造り松、庭ハ自然の山なれ
ハ、岨(がけ)を伝ふて瀧水の、末ハ麓へ遣水の、流れの身
より人あいも、よし足引きの山道も、余程きたれハ
いざひと休ミいたそふかと、それお茶上ケよ、おた
ばこ盆、鯛の煮つけと小鯛のなんば煮、まずく
酒一ツ上ケまし鯛、御鯛くつならちとお広におより
鯛ならお枕をお用鯛とて、立さわく、ヤレ鯛そふ
なマアくちつと静にし鯛、そこでおまゝもたま
わり鯛、酒ももふひとつもらいたい、あとで
勘定もきゝ鯛といへハ、アイく鯛ていはやい事で
ハこさりませぬ、とあいくるしいも世わたりや、御客も
いふも世をわたる心一ツをさまくくに、有為転変の

*およりたいなら―およる「御夜る」―「寝る」の尊敬語。お休みになりたいなら。

世を感じてかく侍しぬ

売鯛と喰鯛心 隔れと 落れば

同じ畑の下水

と認め仕廻、また下りにと挨拶し、是より先ハ
猶坂道もけわし、馬かごやめて歩(あるく)行べし

さいかち・櫳の木・猿すへり、銚子口とて難所なり
老がたいらの甘酒を、一ツ盃吞で又ゑゝつさ、汗汲

流す白水坂、是より大形下り坂、八町平ラ権現ざか

此坂おりて右之方、湯場へ行道権現道、そもく

箱根権現ハ彦火々出見(ひこほほでみのみこと)の尊、孝謙(謙)天皇大平宝

字の御造立、箱根山東福寺金剛院と申なり

*さいかち―皂莢、マメ科の落葉高木。種子の煎汁を古くは染料にし、漢方ではシナノサイカチの代用として利尿去痰薬に使う。

*箱根権現―箱根神社の俗称。旧国幣小社、祭神は瓊瓊杵尊・木花咲哉姫命・彦火火出見尊、天平宝字元年(757)の創建と伝えられる。上代の山岳信仰の霊場。
*孝謙天皇天平宝字の御造立―山岳修行僧万巻(満願)が天平宝字元年(757)霊夢の告げによつて三所権現を勧請したと伝える。孝謙天皇はこの年退位、天平宝字二年からは淳仁天皇。
*東福寺金剛院―真言宗。箱根権現の別当寺、箱根神社境内駐車場付近にあったと推定される。

社塔の結構、靈れい宝あまた数多の中に、曾我兄弟の太刀
 かたな、五郎時宗自筆の文に、祐すけつねより給り太刀
 兄弟宮狩かり場の釜、いさ参詣して拝すべし
 八町計り廻りなり、湖水にひゞく鉦の音ハ、さいの
 河原の地藏尊、常念仏の辻堂へ、腰打懸ながむけて詠れ
 ハ、湖の面ひやうくと、富士の高根の真ッ白く、嶽々
 山々打越かほて貌さし出すことく也、よふ似た山とて
 ニタ子山、跡にみなして新しん家の里、爰で打連れだち
 て御関所、同し城主の加賀殿の御預りにて勤番
 なり、滞なく打通り、峠泊りの仙石屋へと着にけり
 けふハ八月晦日なり、朝も早めにしたくして

*祐つね―工藤祐経。鎌倉時代初期の武将。
 伊豆伊東莊を領有し、平重盛に使える。
 富士の裾野の狩場で曾我兄弟に討たれる。

山ごしの小田原人足も、当所に泊り居候まゝ
よろこんで立出(たちいづ)ル、当山の名物とて山赤腹の魚椒の魚
峠を下り(お)れハ、向坂とてまた登ル、はらが平
らの左りの方、伊豆と相模の境也、甲石の立場を
過ぎ、上下久保石割さか・大枯木・小枯木を越へ
れハ、富士見たいらのたいらかに、富士の正面ン是か
ら見ゆる、西にそゐて登鷹(愛)山上ミ長坂より見
おろせば、伊豆も駿河も目の下タに、見へし笹原
はや過て、一柳の墓所あり、小田原に討死とか語る
も聞も勇ましけれ、水家小時雨・大時雨、法華
坂とハ有難や、大事大悲ニに下り坂、観音堂をふし

拝ミ、つか原初音の御座の松、まつ山坂もつゝがなく
 けさからあるいて今井坂、寒川橋打渡り、三嶋の宿
 けふの下りの山路も折もおりとて、雨間あがり
 のミちあしく、格別疲れし身をやしないうて
 まづくたいらの三嶋也、三嶋の社を拝礼し
 此の御神ハ大山祇(おほやまつみ)の神を祝セ祭り、伊豫の国三嶋
 より此所へ移されしとなり、社領五百三拾石、三嶋
 曆爰より出ル、四九とセの夏春も参詣し、社塔宝
 物悉く拝見ス、宿の中程左りの方、伊東へ行道
 ありしく(宿)を過れハ千貫樋、爰ハ伊豆と駿河の境なり
 爰(そばきり)に蕎麦切名物也、千貫樋のみ(水)な上ミハ宿の

*三嶋の社―三嶋大社。祭神 事代主命
 大山祇命。伊豆国一ノ宮、五百三十石の
 朱印地。頼朝が源氏再興を祈願した社。

*千貫樋(せんがんどい)―三嶋の薬寿園
 の小浜ヶ池は水量豊富な湧水で、現清水
 町内の村々はこの水を利用して
 伊豆と駿河の境を流れる境川の上に用水
 路をかけた。これが千貫樋である。
 「名所図会」には「三島の駅の西にあり、
 伊豆の水を駿河へとりて、田園の料とす。
 はじめ青銅一千貫をもって、水の料に贈
 りけるよりこの名あり」とある。

裏て、明神の西に当りて二三丁、四方の湖水あり、水青々と涌^{ハキ}出て物凄し、此辺の田畑、また香水も此流を用るよし、其あふれ樋を伝ふて駿河へ取、あた^(値へ)へ千貫也と言伝ふ、足柄道ハ右之方、喜瀬川^(黄)の里立場なり、昔ハ名高き宿と言、彼^(かの)亀菊か墓あり、治承の乱ンに頼朝・義経対面ありし所と言、沼津の宿の入口に山王の社あり、頼朝公、富士のに御狩の時の釜ニツありしを盗賊の為に盗み出しけれども、重^キかゆへにさよ更て川へ捨たる釜が淵、此あたりに有とこそ言となり、此川の向^ウ靈山寺といふ寺に、重盛の廟所^{はか}あり、此沼津の宿と申ハ、三枚橋の城として甲州持分の時、山縣か居城なりしを

*黄瀬川宿—治承(1177-81)の頃、交通の要衝のみならずこの地方の歓楽の中心地であった。

*亀菊が墓—亀菊、生没年不詳。鎌倉時代前期の白拍子。後鳥羽上皇の愛妾。伊賀局とも。この「亀菊」のことか？平安京の住人がなぜこの地に墓があるのか。

「名所図会」には「亀菊」ではなく「亀鶴」とある。遊女亀鶴はここ黄瀬川の里に住んだ。亀鶴は建久元(1190)年頃の白拍子。
*富士のに御狩の時の釜—？

*靈山寺重盛の廟所—平重盛のことか。鷲峰山靈山寺、真言宗で一大内の観音さんといわれ、駿河七観音の一つ。
*三枚橋城—沼津城のこと。武田勝頼が小田原の北條氏に供えて築いたといわれる。

慶長の戦に破壊せられしとなり、扱こそ宿の入口を
川曲輪と言、宿を過れハ千本松、梢何ン里かつらなりて
見事也

加茂の長明の歌に

見渡セハ 千もとの松の 末遠ミ

縁につゝく 浪の上哉

此辺に六代松とて門学上人、六代御前を助けられし

(文覚)

所なるよし、椿林を打過て、小諏訪・大諏訪立場茶

屋、原宿越て一本松、日本一の富士の山、原、吉原の間より

見ゆへが真正面、根の方まで残りなく、抑(そもそも)此御山ハ人皇

*千本松原―天文年間、増誉上人が潮害を防ぐため一本一本経を唱えながら松苗を植えた。明治になって、開発のため伐採が起きたとき、若山牧水はじめ市民の大反対で伐採を免れた。

*加茂長明の歌―『東関紀行』中にある和歌。作者は不詳。江戸時代『長明道中記』などとして流布していたらしい。

*六代御前―平維盛の遺子六代が鎌倉に護送される途中、この地で首をはねられそうになったが、文覚上人の命乞いによって赦免された。その後六代は出家して妙覚と称したが、建久十年(1199)文覚謀反に連座した罪で処刑された。従者が六代の首を松の寝方に埋めた。その碑が沼津市東間過度にある。

七代孝靈天皇五歳、近江の国さけて一夜に湖水と
なるとかや、其夜富士山秀ル絶頂まで九里余、直(た)夕
にハ二十五丁といへり、四明に雪降りて、六月十五日の昼ヒル
消て、又其夜降とて

万葉集に

不二の根に 降り置雪ハ 六月の十五日に

(みなづき)
(ぬれば)
消てハ 其夜ふりけり

此山の御神ハこの花さくや姫を祭るとかや、諸人
百日精進して、六月禅定(ぜんじやう)す、足鷹山ハ延暦年

*孝靈天皇五歳—七代孝靈天皇の治世の五年

*不二の根に—万葉集卷三・三百十九番の歌一首。短歌併せたりの短歌二首の内の一

*この花さくや姫—木花開耶姫、大山祇神の娘、天孫瓊瓊杵尊の妃。浅間神社の祭神。

*禅定す—禅定は高い山が信仰登山の対象になったところから、高い山の頂上をいい、「禅定する」は、富士山・白山・立山などの高い山に登って、信者が修行すること。

*延暦年中云々—『駿河記下巻』愛鷹山の項に「厩令云、足鷹山は元平地なりしが、延暦二十一年三月、雲霧晦冥なること十日許りありて後山となる」とあり、日本史総合年表に「延暦二十一年(802)一月八日、富士山噴火」(出典日本紀略)とある。

中雲霧覆ひ、忽然として出来たりといふ、頂上鋸
 が嶽といふ、宝永山ハ、宝永年中富士山より土砂を吹
 出し出し集り所山となる、世に宝永山といふ、諸国江
 砂降りしと年代記にも見へし、浮島が原・柏原、^(柳)鱧^(うなぎ)の
 かば焼名物也、元吉原や中吉原、爰こそ今の吉原宿、
 又ふり返り見る富士ハ、根方の邑家^(柳)に煙り立のも
 立タぬ^(柳)も、風景画ノことく計り也、爰に孝子五郎右衛門
 と言百性あり、忝くも其孝心、上聞に達し
^(ぎよかんはなはだしき)
 御感甚敷余り、御褒美あまた給りて、今に栄へて
^(のめども)
 今泉、吞共^(のめども)尽ず汲めども尽ず、家富て其名ハ

*宝永山―富士山南東側の中腹にある火山、宝永四年(1707)の噴火によって生まれた古富士火山の一部標高2707メートル。

*浮島が原―富士市沼津市にまたがる湿地帯。昔は広大な芦の原であったろうが、今はほぼ埋め立てられている。承久の乱により、上皇方の藤原光親・同宗行がこの辺りで処刑された。
 *柳原―楊原。駿東郡楊原、現沼津市。

*孝子五郎右衛門―今泉村(現富士市青島町)の五郎右衛門は、天和二年(1682)將軍綱吉から孝子として表彰された。大正三年に孝子之碑が建立された。

四方にしられけり、夫より漸々吉原宿地倉屋ニこそハ着にけり

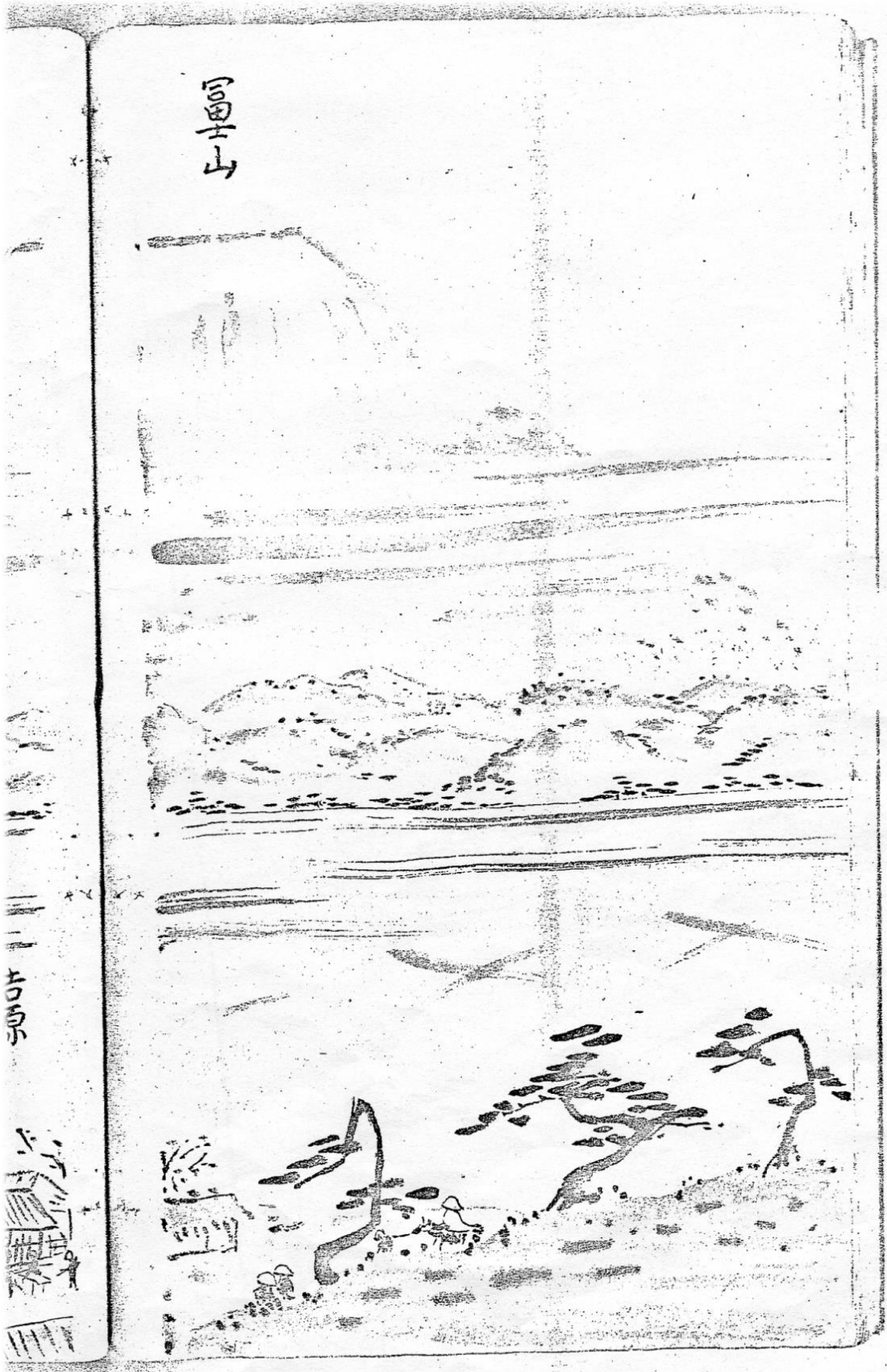
けふハ菊月朔日にて、旅宿の門ト出も吉原といさむ駒引ひん／＼馬士の歌ニ、ゆうべナア三百またまた、今宵もなア引どてらぶつくくつてなア、はりこんだなア、引トわからぬ馬士の馬かごも名もよい事ヲ菊月といさミ行く、爰に原（厚）原村とて吉原宿より半道計り右之方に、曾我兄弟相尋、仲村より此所へ移り住居セしと言伝ふ、隣村ニて久沢村、真言宗ニて善福寺境内に、兄弟の石塔もありと言よし聞伝ふ遙に見渡し行程に、武士にハあらぬ富士川江（着け）付バ

*菊月―（菊の咲く季節にあたるところから）陰曆九月の異称。きくげつ。

*曾我兄弟の石塔―「名所図会」には「曾我兄弟の禿倉（ほこら）」として一項あり、それには「富士川の東、平垣の左の山際、厚原という所にあり、土人、曾我八幡という。今も敵討ちの者、信ずるに靈心ありという。その側久沢というに福泉寺という寺あり、ここに曾我兄弟の石塔あり、云々」とある。本文の善福寺は福泉寺の誤り。

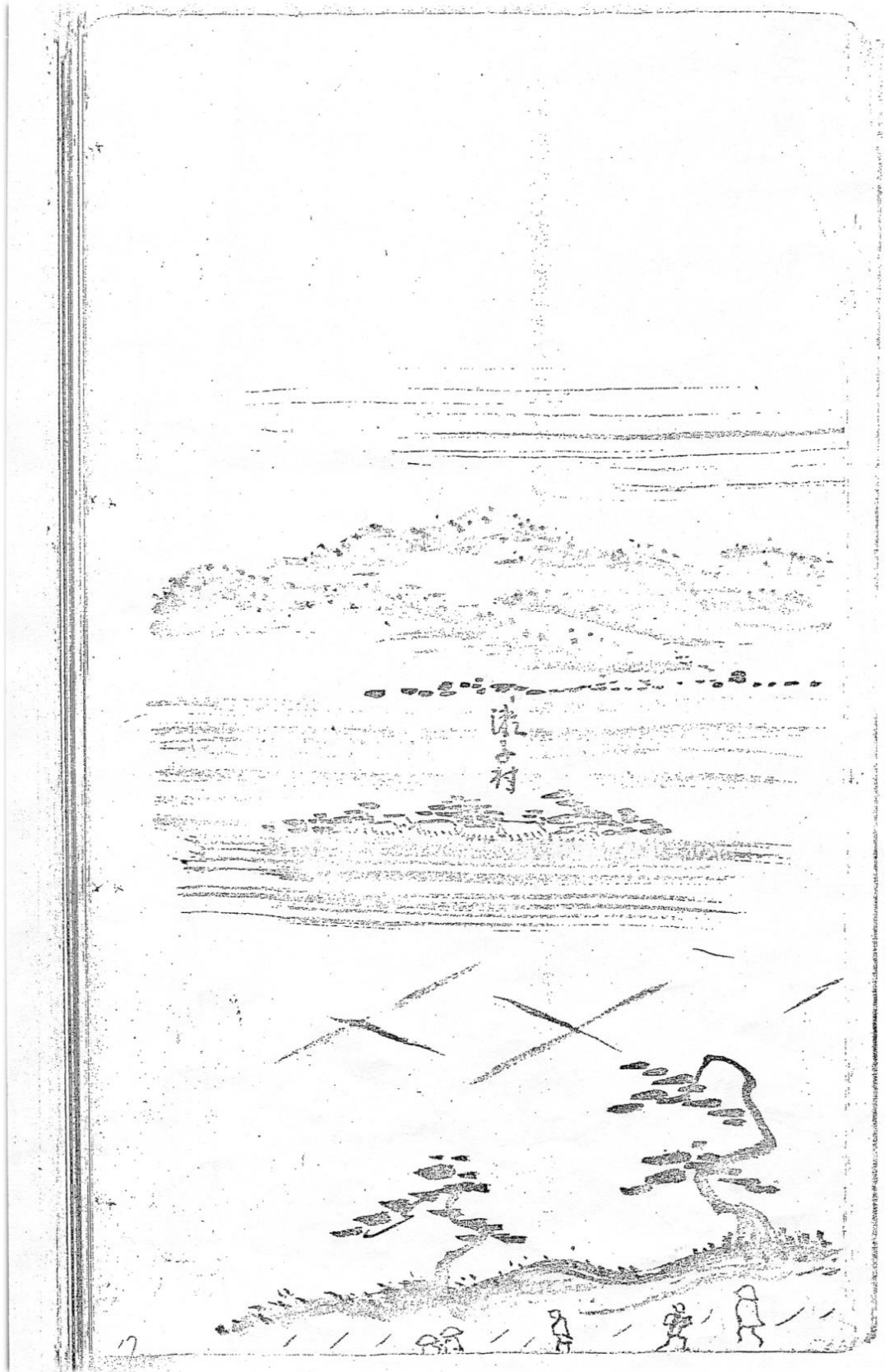


高野山



高野山





船渡し、無事に渡れハ岩淵とて、名物栗の
 粉餅・さゝる壺焼、甲州龍王煙草、当国富士煙
 草、くわも喰ひたし、さゞひもたべよ、跡でたば
 こも吞たしと、セわしくゆけば、小池のさと
 此あたりよりふり返りみれハ、登りに富士を
 左りに見る、夫足元があぶないぞ、ちよろ／＼涌
 出ル清水あり、是か義経硯水、左りの浜辺ニ
 六本松、吹上ケの浜と言、是ぞ昔の海道とや
 浄瑠璃姫の恋こがれ来て、爰そはかなき物語
 うそかまことかしらねども、よい蒲原の宿な

*岩淵―慶長十二年(1605)徳川家康の命により、京都の豪商角倉了以が、甲州鰍沢(岩淵)に富士川舟運を開いてから、岩淵はその発着所として繁栄した。岩淵の一里塚もあり。

*湧出る清水―岩壺の清水。

*硯水(けんずい)―間水・建水、①昔の二食時代、朝食と夕食の間に食べる間食②小昼・おやつ③酒の異称

*六本松―後述の浄瑠璃姫の項を参照。

*吹上ケの浜―静岡県蒲原町の海岸。

*浄瑠璃姫―伝説に「源義経が金売り吉次に伴なわれて奥州へ降る途中、三河の矢矧の宿の長者の娘浄瑠璃姫と契りを交わした。姫は義経を恋慕って陸奥へ下ろうとしたが、蒲原の吹上げの浜で病に倒れた。里人は姫を哀れんで塚を作って、六本の松を植えた。」という。蒲原中学校内に浄瑠璃姫の墓がある。

れや、此海辺こそ田子の浦

赤人の歌に

田子の浦 打出てみれハ 白たへに

富士の高根に 雪ハふりつゝ

とハ此辺のことゝこそ、誠にけしきも由井宿
をこへれば薩埵^(さつた)峠にさしかゝる、茶屋の女の口
まめに、お休なされ休ませんか、あじのよいすし
鮎のすし、アイ／＼返事も呼込も立たり居
たり、打たり舞ふたり、扱も目か舞ふ昼さが
り、さらハ昼飯仕らん、イエ／＼爰でハ飯ハ上ヶぬ

* 赤人の歌―万葉集卷三・三百十七番の長歌の反歌として
「田子の浦ゆうち出て見れば真白にぞ
富士の高嶺に雪は降りけり」がある。

* 由井宿―由比宿は、静岡中部、薩埵峠東側のふもとにあり、東海道五十三次蒲原と興津の間の宿場町。桜海老が漁獲される。

是ハ一興とハどふじや、飯売ことハ所の法度、肴
で酒を上ツて下んせ、コリヤむこい、しからハ、そさまの
まいるのを、無心ながらも所望いたそふ、一ツ盃
ツ、御報志あれ、夫レハ成程お安いこと、朝飯の残り
がある、一ツ盃ツ、あけませふ、コリヤ忝ない、もりもよし
買った飯かつより又うまい、殊にそさまのお給仕で、わし
ばつかりが片思ひ鮑の貝、焼テモうまし、乙女の
前垂レ襷、下夕にハおかぬ壺焼ハ螺さいなことでも手
練なり、此つぼ焼の焼かけん汁のかけんも喰かけん
腹のかけんもよふなつて、かくなん

昼過でよい壺焼にもらいめし

薩さつ埴た一ツ盃腹ハふくら煮に

はらいもお礼も相済だ、扱(あいすん)、爰前より唐腹からつはらで景け
 色しき詠るひまもなし、実ニ童の小唄にも花より
 田子の浦伝ひ、塩焼煙立登り、富士の煙りハ空に
 消へ、渚に海士のかしよなく、ぬるゝ袂や袖しが浦
 千船百船帆を上ケて、ほのかに三保野松原や
 岸打ツ浪ハ親知らず、子も白浪に打寄スる、名
 のミ残りし昔のミち難や、天和(てんな)の頃今(合)、此道を
 開かれたり、又山ン上に地藏尊まします故に
 此の山の薩埵峠を真ツ下り、興津川原打越て、右に
 身の延の参詣道、興津の宿ハ清見浮(鵜)、むかしハ爰
 に関をすへ、清見関と詠じもむべなる哉、爰ニ

*富士の煙りはそらに消へ―西行法師の歌
 に「風になびく富士の煙は空に消へて行
 方も知らぬわが思ひかな」がある。それ
 を踏まえるか

*天和の頃―1681～1684年間

*薩埵峠―東海道の難所。平安時代の末頃
 に、付近の海で漁師の網に地藏薩埵(菩
 薩)がかゝり引き上げられて山上に祀ら
 れた。そのため、薩埵峠と名付けられ
 た、という。

*清見関(きよみがせき)―静岡市清水の
 興津にあった古関。清見寺がその跡とい
 われる。

宿を過れハ清見寺 領三百五拾石、座敷張付名は

雪船（雪舟）の筆とかや、三穂の松原・田子の浦、此座敷より

一ト目に見ゆる庭上に、拾七間の梅か樹あり、大神

君の召れし御駕籠あり、拝すへし、門前の

茶屋にて蕎麦切名物也所の体もべつたへた、膏薬店

ハ八左衛門、名物女子のことはも、横須賀過て海の西

外に類ひハありとの浜、へつたり下にいはら村、いはら

茅原おしわけて、枯レ葉残りし薄か嶋、アレ見よ

三穂の松原ハ豎江一里、広サ廿余丁といへり、東へ

長く西ハ地に続ク、此嶋の松の葉三穂なり、羽衣

明神、社領百石、宮の後に楠あり、拾六畳敷と

*清見寺（せいけんじ）―臨濟宗、天武天皇のとき、鎮護の關寺として仏堂が建立されたのが創建清見潟の風光を眼下に見る勝景に恵まれ、東海道を往来する人々によって紀行文や歌にも詠まれて来た。

*膏薬店―清見寺の門前に「清見寺膏薬」を売る店が数軒あった。

*横須賀―横須賀は横に長い砂丘（すか）を意味する。大須賀町に横須賀城跡があるが、この城が築城された頃は石垣下には海浪が打ち寄せていたという。

*羽衣明神―御穂神社のことか？御穂神社は式内社、祭神、大己貴命・三穂姫命、航海・漁業の神。

いふ、天の羽衣、神主納置しといふ秘物なり
吹上の塩とて明神より十町計り南に羽衣
の松の梢、目の下にさなから青海波に似たり
北に富士・足鷹山、東に伊豆の出先キ、西に当て
久能山、近くハ清水の湊、家く悉く見へて
景色言語に絶かたく、おもわす歩む尻軽く
江尻の宿の豊心丹、江戸目馴レねバめづらしく
左りの方に久能山へ行道あり、清水の湊へも是より
入ル、久能山へは江尻より二里、府中よりハ三里といふ
九とセ已前、公務によつて悉く拝見す、依て
爰に記ス

*江尻の宿―東海道五十三次十八番目の宿。
*豊心丹―奈良東大寺で製して興正菩薩
伝来の靈薬と称して売り出した氣付け
薬。

(そもそも)
抑 久能山と申奉ルハ、元和二年

東照大神君御鎮座まします、御山の東西、屏風
を立たる(ちとく)こどく、北ハ谷深く万獣の道を断、南ニ
面シ十七曲りの御坂を登り、一の御門坂ハ御櫓造り
番士武器を備へて嚴重也

御宮御本社・御拝殿、金銀をちりばめて廻廊・
唐門・御玉籬(たまがき)・二重の楼門・五重の塔、以誠(誠に以って)に広大の
御造立に番匠(巧)の切を顕し、四時の花鳥、数千の猛
獸生がごとくの彫工の手を尽し、絵所の筆
ふるふ、朝日輝金物ハ駿ン造ニの海上にきらめき

*元和二年(1616)、徳川家康死去、遺骨
を久能山に埋葬、翌年日光に改装し、そ
の故地に東照社を創建、正保二年(1645)
宮号の宣下があり、以来東照宮という。

御存の御重器に御宝物数多納メるゝ、唯恐多ク
筆に顕すことを憚り、善尽くし、美を尽し
結構ハ言語に述難し、御社領ハ三千石、榊原越
中守代々守之御別当、德音院と言、江尻の宿
を開放れて左りの方十町計り、脇道に入ッて
草なき明神の社あり、日本武の尊、東夷征
伐の時、賊徒、野火を放ッ、尊、劔をもつて切払ひ給へ
ハ、放火忽鎮りしと也、小吉田を過て国吉田、爰ハ
駿河の府中の宿、左りに久能江行道あり、御城ハ
宿のうら道り、当城むかしハ今川家代々の居城

*榊原越中守—久能城守衛を務めていた榊原照久が家康の遺命を受けて神主となる。兼ねて久能山総門番(久能奉行とも称する)を勤め、その子照清がこれを継いだ。寛文四年(1664)神職を辞し、門番は世襲して幕末に至る。正保三年(1698)学頭の制が設けられ、その坊を德音院と云った。

*草なき神社—草薙神社。静岡市清水区草薙、旧県社。祭神は日本武尊。

*劔—天叢雲劔あめのむらくものつるぎ(草薙劔)

*駿河の府中の宿—駿河国の首都、駿府を府中と言う。現静岡市。

*今川家代々の居城—今川範圍が、元弘・建武の争乱に軍功を立て、遠江・駿河兩國の守護に任ぜられ、代々駿府の城を居城とした。が、今川氏真のとき、永祿九年(1566)のうらまに松平氏的手中に帰した。

なり、其後

神君御在城、寛永年中、御番城となる、御城

の西に当りて浅間間の社あり、社領二千六百石、先年

参詣して悉く拝見す、二重拝殿・本社・末社・楼

門・唐門・薨をならへ、大造の御造立也、金米山(こんべいざん)

宝臺院、通りより左りに見ゆる、地(寺領)りやう三百石

御神殿 并 宝臺院殿・御靈屋あり、御城下の町

奇麗也、名物ハ駿河細工いろく、桐油・蒔絵(まきい)、其外

芦久保の茶名物也

ばセをの句

駿河路や 花たちばなも 茶匂ひ

*御番城―駿府在番。始めは大番、後には書院番の分掌の一。寛永九年(1632)造置、駿府城の警衛に当たる役職。

*浅間間の社―浅間神社は、神部神社(大己貴命)・浅間神社(木花咲耶姫命)・大歳御祖神(大市比売命)右の三社からなり「おせんげんさん」とよばれて市民に親しまれている。
*二重拝殿―二階建形式の楼閣造の拝殿、浅間造の代表的建物。

*宝臺院―金米山宝台院。浄土宗。二代將軍秀忠の生母西郷局の廟を建て、寺号を宝台院とした。

*ばセをの句―芭蕉の句。

「するが地や花橘も茶の匂ひ」
元禄七年(1694)五月十一日、江戸を出発、十五日島田着、十九日まで滞在した。

是も名物籠細工、駕籠か懸ヶ声二上りに、乗せて
 かき込喜見ン城二町まちとて一ト花街あり、恋もなさ
 けもすぐ通り、余所に弥陸の安倍川是が名代の五文
 どり、取り分ヶ破風やの餅かよい、殊に娘の人相も
 よい、きなこ餅・砂糖もち、ちつと砂糖がかいゝぞ
 や、かゆへ所へ手を廻ル、海道一の餅なりと、誉ち
 ぎつて砂糖をつけ、もひとつ口にほうばりな
 がら

安倍川の餅も娘もよふねれて

あま甘く見たるハ砂糖少なし

阿部川歩行渡り、富士辰巳に見ゆる旅図也

*辰巳―東南。

*懸ヶ声二上りに―二上り―三味線の調
 弦法の一つ。本調子に対して、二の糸を
 一全音高く調律してあるもの、華やかで
 陽気な気分や田舎風を表す調子。
 *一ト花街あり―江戸時代阿倍川流域は
 遊郭町として栄えた。
 *余所に弥陸の・・・―よその地には魅力
 の・・・
 弥陸―弥勒。弥勒町、駿府城下の西端、
 にあり、駿府城下堤添川越町にいた山伏
 弥勒院が開発したという。「名所図会」
 に「阿倍川の東端を弥勒茶屋とて、阿倍
 川餅の名物なり」とある。
 *五文どり―五文取、一つ五文で売った
 餅。阿倍川餅が有名。げんこどり。

蓮台、高欄附にて大勢懸り、水火に残し股迄も
ありなしと思ふ位、此川原に陰陽石・馬蹄石
あり、此馬蹄石と言ハ、其昔佐々木・梶原、池月(いけずき)
(するすみ)摺墨名高キを此所江放つ、両馬の蹄の蹄(ママ)なり
と言、実に間々有を見るに、しつかりと蹄の跡あり、
硯杯に用て重宝す、陰陽石も間々あり、よく
似たる形なり、(おんみやう)ゑんよふ石・馬蹄石、尋当れば
仕合よしとて、先年相士馬蹄石を拾ふ、此人
其後立身セシハマのあたりなり、安倍川七八丁
先キに丸子の方より流れるをわらしな川と言

*池月―生食、生唆。佐々木高綱が源頼朝から賜った名馬の名。

*摺墨―磨墨。梶原景季が源頼朝から賜った名馬の名。両者両馬で宇治川の先陣を争った。が、両馬をこの河原に放ったかどうかは不明。

*わらしな川―藁品(科)川

府中の方を安倍川といふ、川を越れハ手
越の里、右の木からしの森ありとこそ

定家の歌に

木がらしの森の梢の朝な<

名にあらわるゝ神無月哉

急げハつまづく石の小橋、ハット飛退ク驚キ橋

右に長者の屋敷跡、昔重衡(しげひら)の千寿の前ハ、この

長者の娘なり、歌を詠み詩を作り、穴へこま取

羽をつく、丸子の宿の泊りにて、桑名屋へこそハ

着にけり

*手越の里―平安末期から鎌倉時代にかけて宿駅として栄えたが、南北朝時代以降は西隣の丸子の宿に繁栄を奪われた。

*木枯の森―「森はこがらしの森」と『枕草子』に書かれて以来、歌枕として有名。藁品川(わらしながわ)の河原の真ん中にある。

*定家の歌―『拾遺愚草』にあり。

*長者の屋敷跡―手越の長者の屋敷跡。平重衡が関東へ送られる途中、そのの娘千寿の前と恋仲になった。

丸子の宿のとりゝ汁

ばしやう歌に

梅若菜　まり子の宿の　とりゝ汁

けふハ九月の二日なる、夕べ喰たる麦とりゝ

青空(のどけ)長閑く晴渡り、とんひも舞ふてとりゝ

汁、丸子の橋を打渡り、右へはいれ(さいおくじ)バ柴屋寺

宗長の寺吐(とげっぽう)月峯、六七町も有といふ、山間イ行

テハ宇都の山、是から先キハ山路なり、昔の蔦の

あぜ道ハ、此あたりのことゝこそ、今も蔦かつら

繁れりと言

*ばしやう歌に―はせを(芭蕉)句集に「乙訓 餞別に」としてあり。

*柴屋寺―臨濟宗。吐月峯の名で知られ、連歌師宗長ゆかりの寺。

*宗長―文安五年(1498)、島田の刀鍛冶五条義助の子として生まれ、十八歳のとき出家、興津清見寺で出会った宗祇に連歌を学び、上京して大徳寺の休に師事する。ともに、しばしば宗祇の旅に随行した。柴屋宗長という。

*うつの山―宇津ノ谷峠(うつのやとうげ)。

*蔦のあぜ道―蔦の細道。

両所とも『伊勢物語』に登場して以来、紀行文や歌舞伎の舞台となつて、東海道の名所になつた。

古歌に

露ふかき 蔦のあぜ道 わけこへて

岡部にかくる 宇つの山ミち

宇津の山 月たにもらぬ 草の庵

夢路たへたる 松風ぞ吹ク

十団子も 小粒になりぬ 秋の風

名物うつの谷の十団子、峠に地藏堂あり

是からが下り坂、程なく爰ハ岡部の宿

古歌に

夕日さす けしきもさびし 松たてる

岡部の里ハ 山影にして

*霧ふかき―『新拾遺和歌集』法印定円の歌として

露しげき蔦のしげみを分け越えて
岡辺にかくるうつの山道
*宇津の山―『六華和歌集』家隆の歌
うつの山月だにもらぬつたの庵
夢路たえたる風の音かな

*十団子も―許六の句

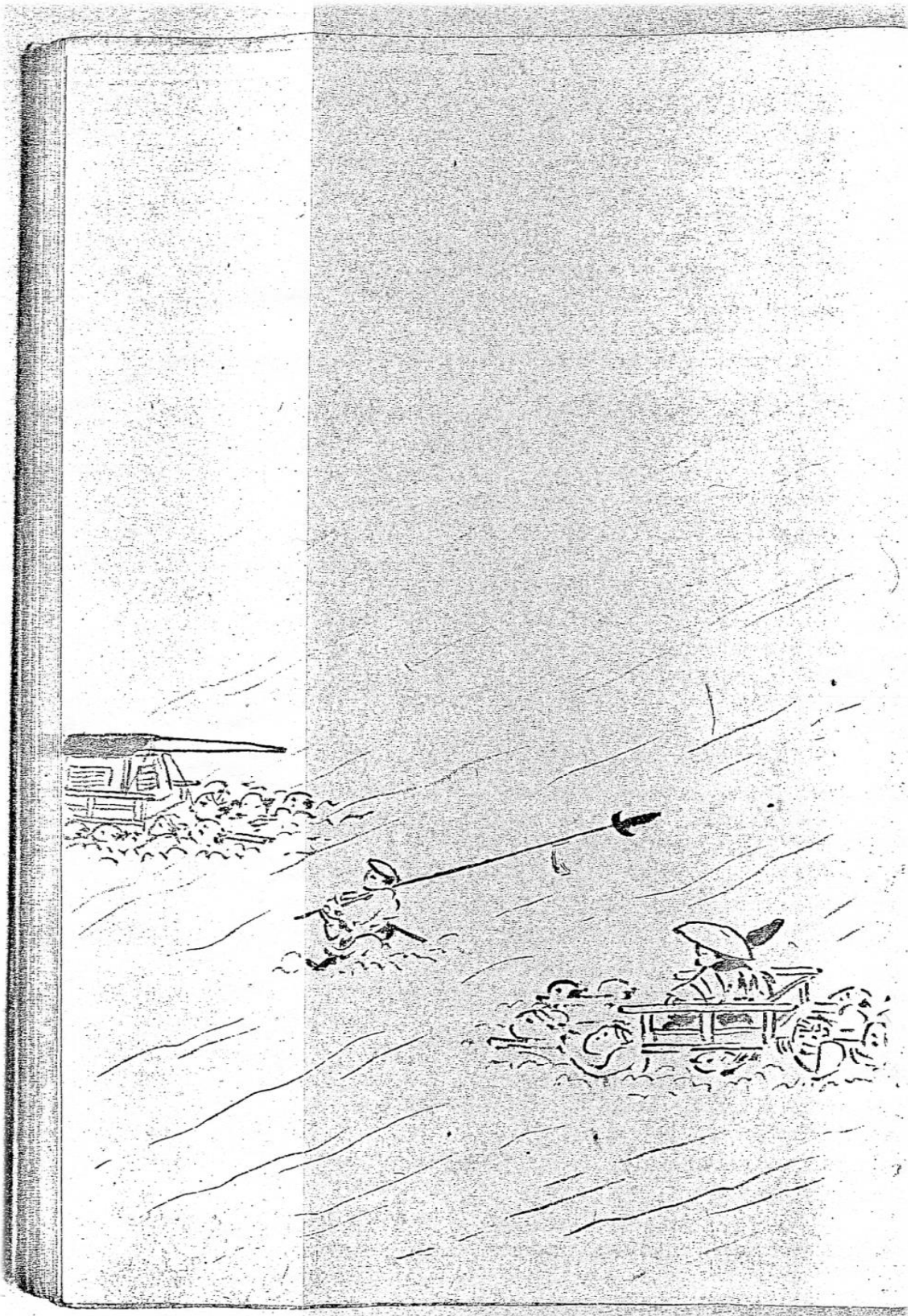
*十団子―とおだんご。宇津谷峠の麓の茶屋で売った名物の団子。白・赤・黄などにそめた小さな団子を十個ずつ竹串や麻糸に通したものだ。また茶屋の女が十個ずつ杓子ですくって売ったともいう。
*岡部の宿―東海道五十三次の二十一番目の宿。現在の藤枝市岡部町。

*夕日さす―「海道百首」参議為相の歌
夕日さすけしきもさびし松たてる
をかべのさとは山陰にして



大井川







繩手過れば田中領、八幡の大社あり、是駿州
岡部氏・朝比奈氏の氏神とかや、（あぶみ） 鐙ケ淵、鬼ケ
嶋水盛過て、藤枝の宿に入ル、宿を過れハ瀬
戸の川、瀬戸の染飯黄に染て、青嶋過て田中
領、是迄なりや棒杭の、鱈盛とて浮名立ッ
娘の髪も嶋田宿、旅人爰にてきもを消す
聞及にたより大井川、是駿州の境なり
巾凡式十丁余

古歌に

思ひ出る 都のことハ 大井川
いくせの石の かつもおよばじ

* 田中領―現藤枝市。西益津中学校の体育館の前に「従是にし田中領」の標示杭が立っている。
* 八幡の大社―若宮八幡社（祭神大鷦鷯命・品陀和気命・息長帯比売命）岡部氏の氏神。現社殿は貞享三年（1686）岸和田藩主岡部長敬が造営。
* 朝比奈氏―掛川城主朝比奈泰朝 1569年開城。

* 染飯（そめい）―クチナシで黄色に染めた強飯（こわめし）東海道藤枝・島田間の小駅瀬戸（藤枝市瀬戸）の名物。

* 古歌に―『十六夜日記』に
思ひ出づる都のことはおほみ河
いく瀬の石のかずも及し

大井川連^(蓮)台越也、瀬定^(さだま)らす、是東海道一の
 大川也、滞なく打越して、向ハ金谷の宿なりけり
 金谷坂を登りて暫く平地也、此所より見わたセバ
 前ハ岩山、向に大井川の流雲の如く、富士山ハ北に
 当りて見ゆる、海道いちの景色なり、牧の原より
 下り坂、爰も名所と菊川や、此川上に菊の花の
 名所有、さよの中山飴の餅、右に子育観世音
 恩^{おん}も誓^{ちかい}も有難や、妙法蓮華経品代二十五文がして
 やつた、扱もうまいハ飴の餅、コリヤおかし、よい年を
 して飴の餅いくつ、五ツたべた

西行の歌に

* 金谷の宿—東海道五十三次の二十四番
 目の宿

* さよの中山—佐夜中山・小夜中山。掛川
 市東部の山。平安時代から東海道の難所
 の一つ。歌枕。
 * 飴の餅—96ページ注を参照

年たけて またこゆへしと 思ひきや

命なりけり さよの中山

此歌に題して

年たけて まだ喰きかや 飴の餅

五ツしてけり さよの中山

むけんの鐘ハ右の方、高山御嶽山ン観音寺

と言寺にあるところ、此鐘をつけハ無量の宝

を得ルとなり、去ルによつて撞人大分云込あれ

ども、堅ク禁して撞カせず、是をいかにといふに

彼梅の枝このかた、此山へ参詣もせず、むかしの

*年たけて―新古今集卷十羈旅歌
年たけて又こゆべしと思ひきや
いのちなりけりさ夜の中山
西行法師 とある。

*むけんの鐘―無間の鐘。掛川市東山にある観音寺にあった鐘。この鐘を撞くと来世では無間地獄に落ちるが、この世では富豪になるといふ伝説があった。
―無間―むけん、後世では「むげん」ともいう。たえまないこと、ひつきりなし。
*観音寺―観音寺の誤りか？

市川柏莚・瀬川露孝・吉田文三、何レも代々撞之
(ママ)尤撞(鉢)をつけば三百兩、手水鉢(鉢)をたゞけバ爰に
 三兩、かしこに五兩、めて八兩、はした金といへども
 江戸・京・大阪度々の鐘の段に寺役取続かす
 八兩に三兩壺分の利足をかければ、一ヶ年にハ
 元利めて拾六兩、いかに諸人の為なればとて、終に
 札のいゝてもなし、今世上に流行の富さへ一割
 の奉納ハお定り、しかるに金を得たる輩も此
 寺へ三文も奉納した例なし、さりとてハ不仁
 千万、其上に、だんないだんない大事ない、などゝ

*市川柏莚—四代目市川団十郎の俳名。
 *瀬川露孝—瀬川路孝、歌舞伎役者女形。
 *吉田文三—吉田文三郎、人形浄瑠璃の人形遣い。

*富—富くじ。江戸時代から流行した一首の賭博的興行。興行主が富札を売り出し、それと同数の木札を箱に入れ、所定の日、箱の小穴から錐で突き刺して当たり番号をきめ、規定の賞金を与えた。興行主は売上高から、賞金の総額・必要経費を差し引いたものを取得する。多く寺社が興行を許されて修復財源とした。

痰を切ルことく、近頃不埒の至り也、殊に此世は
 蛭に責られ、未来永々無間地獄へ落ると
 あれハ、諸人に罪をあたえるも気のどく、所詮
 此鐘の有からハ無益なりとて、住僧、井の中へ鐘
 を埋しより、井鐘無事とハ是よりはじまる
 又往來の真中に夜泣石（下段の図）尺渡し
 しんらん上人切付給ふ六字あり、右の方に夜泣の
 松、昔臨月の女、盜賊の為に殺され、児ハ出生して
 敵を討しと言伝ふ、子育の観音、餅の飴、また
 八から鉦も爰の名物と聞、是もよかろう、一ッたべ
 よふ、コリヤおかしいと蕨餅、日坂の宿打過て、是より

*痰を切る―痰火・痰呵、を切る痰火を治
 療することを「痰火を切る」といい、こ
 れがおおると胸がすつきりするところか
 ら、胸のすくような鋭く齒切れのよい口
 調で話すこと。



*夜泣石―東海道の金谷から日坂に通じる
 小夜の中山の伝説「昔この山の夜泣石の
 石のかたわらで、妊婦が山賊に切られた。
 このとき切り口から生まれた子が、かた
 わらの石陰で夜になると泣いたので「夜
 泣石」といい、久延寺の観音様にアメで
 育てられたので、久延寺は子育観音と子
 育飴で有名」又、子は成人して研師（と
 ぎし）となり、刀の刃こぼれから母を切
 った賊を見つけて仇討ちをしたといわれ
 る。

西へ掛ヶ川領、山に花ナ(最早カ)の里こへゆけば、爰早程
なく掛川の宿葛物也泊り宿なる肴屋へこそハ
着にけり

古歌に

これもこの所ならひを葛てふ布ヲ

掛川の里

城主太田撰津守殿領分也、当時大阪御城代也
けふハ九月の三日なる、日和もよしと立出ル
宿の中程に秋葉道、右之方に石脾(碑)あり

二瀬川、はゝ川立場なり

古歌に

はゝ川や瀬川の水の底きよミ

*花ナの里―「花」に「ナ」が送つてある。これは「平仮名・片仮名が創案されて、漢字仮名交り文という新しい文体が起つたが、古くはもっぱら漢字の訓み方を示すのが目的であつて、これらは「作テ舎ヤヲ」のように傍訓と送仮名とを区別せず記したり「王ト(みかど)」「国ニ(くに)」のように名詞の一部に仮名を送ることもあつた。この風潮は永く後世にまで及び、一般には一定の決まりがなかつた。」『国史大辞典』より。本文で典型なのは「左り」などである。

*葛布―掛川の名産
*これもこの―『藻塩草』に為相の歌
これぞ此所ならひと門々に

葛てふ布を掛川の里とある。

*城主太田撰津守―文政十二年(1829)當時は資始が藩主で、文政十一年大阪上代、天保二年(1831)京都所司代などを歴任した。

*はゝ川―はら川、掛川市原川・袋井の間の立場。酒・茶店などを出す。

*はゝ川や―『名寄』に雅経として
はら川やせ川の水の底清み
すむ里人の心をぞしる

すむ里人の心をそしる

なぐりの郷ハ花蘆（こぎ）を皆家／＼に掛川領

是より東に明星寺、日蓮の父貫名氏（ぬきな）、爰に

墓所のあるとかや、袋井の宿うち過て、繩手越

れば熊野ノ宮、社領七十五石と言、社造竹田の

番匠（ばんしやう）共飛驒の工が建しともいハゞ岩井の村続

あの山際に、頼朝の放し給ひし鶴舞ふて

今に木原の里越へて、西嶋過て三日の橋、見附

の宿ハ、上方（かみがた）より下りに富士を爰で見ると、そこで

所の名となり、彼宗盛（かの）のおもひもの、湯谷か旧跡（こせき）

*花蘆—沓部村の名物として花筵を織りて諸国へ商う。

*明星寺—妙星寺。沓辺村にあり。

*繩手—田の間の道、長く真つ直ぐな道

*竹田の番匠—「名所図会」に「土人いわく、むかし武田の番匠名譽ありて轄（くさび）一本にて留む、という。」

*見附宿—現磐田市。東海道五十三次二十八番目の宿。

*所の名となる—俗説。「今の浦」の湾入した入海付之地イリウミツキノチから命名されたといわれる。

*宗盛のおもひもの—湯谷、熊野ユヤ、熊野（くまの）信仰で生まれた池田の長者の娘が、かつての遠江守宗盛（清盛の子）に寵愛され、故郷の母が病気になるが、帰国を許されず、清水寺の舞台で「いかにせん都の春は惜しけれどなれしあづまの花や咲くらん」とうたい舞って、故郷へ帰ることを許されたという話がある。また、池田の興行寺に熊野御前の墓がある。また、長藤（国の天然記念物）で有名。

此右に池田といへる所あり、惣社の宮の神さひて、爰ハ

*惣社の宮―古代国司参拝の便利のため国中の神々を集めて祀った。

遠州国分寺、鴨川橋を打渡り、八幡社領三百石

*遠州国分寺―現遠江国分寺跡。国特別史跡。

大乘院の立場なり、長森こへて此所天瀧川、此川ハ信濃

*八幡社―府八幡宮、祭神…仲哀天皇・神功皇后・応神天皇
藤原時代の僧形八幡と二女神像がある。
奈良時代遠江国司桜井王が国府の守り神として祀ったことに始まるといわれる。

の国諏訪すの湖水の流也、見附の方を小天瀧龍、濱松の

方を大天瀧龍と言と也、大水の時ハ拾丁程川上へ廻るべし

子安村といふ所にて渡ス也、川をぶなんに越へ渡り

是から先キハ濱松領、薬師新田打過て、御神の

*御神の森―蒲明神。

森ハ右之方、社領三百余石也、神主を蒲五郎範

*蒲五郎範頼の子孫―三河守源範頼の末裔。

頼の子孫と言、是よりまこめ橋を打渡り、爰ハ京都

とお江戸との真マ中なりと聞きからに、古郷の空も

遠江、姿言葉も移り行、見馴ミなれシ色ハ濱松の泊とまり
り宿なる三河屋へこそハ着にけり

けふは菊月四日なる、日和ひよりもよしと立出ル、大

手口、城主水野越前守殿領分也、当時御役也、城下寄キ
麗れいなる町也、此二月、宿内より出火にてはたごや四十軒程
類焼ス、宿の亭主の嘶し也、右之方に五社大明神

社領三百石、隣にて諏訪大明神、社領三百石、両神とも
に大社也、先年拜せしに、莊嚴そうげんきらびやかに、宮
建、至てよろしく候得共、類焼し給ふ跡にて、鳥居其
外諸堂社、いまだ建(たてず)す、此宿の名を昔ハ引馬と言よし
濱松と言ハ、十町計り脇に松林あり、元濱松野口と

*大手口―城の正面。

*城主水野越前守―水野忠邦、肥前唐津藩
(内実二十万石)から浜松藩六万石(内
表ともに)に所替、唐津藩主は長崎警護
役を課されていて幕閣の一員になること
はできないので、転封して昇進するため
盛んに運動を行った。文政八年(1825)十一月
(1825/31)大坂城代、天保五年(1834)十一月
年(1834/43)老中。天保の改革を推し
進めた人物。

*昔は引馬と言う―現曳馬と書く、大宝二
年(702)の持統上皇三河行幸時、万葉歌
に「引馬野に・・・」とあるが、其の歌
の比定地とされていたが、現在は三河御
津の御馬付近に比定されている。

言と也、名残の町を開放れて、十四五丁脇に気賀の
 江へ行道有、此江によつて遠江と付られたり、都に
 近き江をいゝ、都に遠き江を遠江と付られし
 となり、時刻も移ると立出れハ、篠原過て左りの方
 八幡の社あり、音羽の松とて七曲^{まがり}りなる大木を
 濱松ともいゝ、さつ／＼とさゝんざ諷にて舞坂や
 新井の渡し、順風に真帆打懸て乗出す、おも
 梶とりかじえいさつさ、さつと打ッてハさつと
 引、白浪立ッ浪、今切の、切レどもはや見へ隠れ
 出嶋／＼に小松原、葉ごと／＼に色添て、程なく新

*名残の町―浜松市鹿谷町、浜松城の北西、
 本坂通に沿う。「なぐり」とも称した。
 *気賀―天竜川を西に渡つて、東海道とわ
 かれて北へ進む道が姫海道で、細江町気
 賀の関所跡あり。

*音羽の松―街道の南、小沢渡村にあり、
 古松にして枝地上に垂れて砂へいさごに
 這い、また立ち延びて風流の名木なり、
 野口村のさゞんざの松を兄として乙松
 (おとまつ)ともいう。

*さゞんざの松―颯々松。『曳駒拾遺』に曰
 く
 「野口村の田圃の中に松林あり、一株を
 いえるにはあらず、すべて三拾本生うる
 松林なり、伝にいわく、足利義教公富士
 見に下向のとき、この松の下にて「浜松
 の音はさゞんざ」と諷い主演したまうよ
 り名付け初めしなり、云々」。

井の関所なり 此所舞坂より
新井迄海上壱りの船渡し也 無(ト)(ト)おりなく 滯打渡り

御関所同様ニ通行して、抑此今切の渡しと申は
後土御門の御宇、明応八年六月十日大地震して
山奥より螺多ク飛出、山野陸地忽にさけて海
となる、風あれば渡船はたして怪我有ルゆへ、宝永
丑年、今切の切レ口に数万の杭を打て浪をよぎらし
める、諸人の難渋をたすく、旅人爰に君恩の深キ
こと今切の海にしかすとかん儀(激)す、さらば爰らで
休まんと、新井名物鱸(鱸)のかば焼、コリヤよかるふ、ヤナニ女
性、某(それが)し先ン年こゝをとふりし時、是へよつて昼
飯セしが、三十歳余りの若後家の乳呑子を介抱

*今切―明応七年(1498)八月二十五日、東海地方で大地震・津波のため浜名湖が遠州灘とつながる。(後法興院政家記)本文には明応八年六月十日とある。又『岡崎東泉記』にも明応八年六月十日とある。これは、5、6年に一度という暴風雨に見舞われ、外海からの高波・高潮が湖内に浸入し、この高波で前年の地震で地盤沈下していたところへ、高師山連峰の斜面が大雨によつて土砂崩れとなり、浜名川の河口が堰き止められ、出口を失った浜名川の水は強大な激流となつて砂堤が低く地盤の弱い所を破つて外海へ流出し、今切が出現した。江戸時代の人にはこの記憶の方が強く残った。「後土御門天皇」かん激す」までの本文は一名所図会(中巻の文章を参考にして)いると思われ

*螺―にな、にし、かたつむり。

しなから甲斐／＼敷あいしらい、世話に成しが
母子ともに替ル事もないか、そこらにならちよつと
逢ふて礼もいゝたし顔みたし、何の夫(それ)にも及
ぬこと、旅ハ気さんじよいかげん、アイ其通り申まやう(セカ)
と言まもなく、鱸さいたる手をぬぐい、朱塗の
膳も四ツ足も、昔しかた地(かたち)のふるびたる、おなし
もちくる人とても、六十余しのしわくちやばゝ、同じ
地代(時代)とおもわれて、鱸もわけて大ぐしの、としま
鱸と思われて、我も後々にはかくならん、ふり行年の
是非もなや、古イを好茶人ンでも、ばゝの古イハ用イまじ
是ばゝ

*あいしらい―応対すること。受け答えること。あえしらい。あいしらう||―あえしらう―の変化で「あしらう」の原型か、という。

*四ツ足―四ツあしの膳。

小野々小町の歌に

面影の　かわらで年の

つもれかし

たとへ命に　限りあるとも

と詠じたり、二度若くハならぬぞや、随分孫子
を大切に、後生大事に願われよ、といへば、此ばゝ
色をかへ、是ハ興かる仰かな、生イ先キ長イ此ばゝに
後生願へと仰ハつらや、此ばゝが此とし迄鱸さ
くのを手業とし、一日か(欠か)ゝして寺参りした
こともなし、また六十に足たルたらず、是からか
せいで廿年、小金を溜メて廿年、合て九十九歳也

*小野小町の歌―古今和歌集にはこの歌はなし。『国歌大観』にもなし。

*後生―仏語。へ前世・今生と相對して用いる。死後にすむ世界、死後生まれ変わる事。後世・来世。

小野の小町ハ色好ミ、わたしハきつい錢好ミ
けがらハしいと不興顔、コレハマつひら誤た
彼の深草の少将も、こなたの氣にハいらぬたち
欲の深草少将の価なれども直(値)きりもせず、財
布の紐をとく／＼と払へしまふて、コレおぼ々

面影のかわらバかわれ 年もよれ

命ながらへ 錢もふけせよ

おぼ々ほとんど笑へつほに入り、是ハ／＼御秀
逸、又お下りに、長居ハ恐れ、新井の宿、さらハお暇
もふさんと、小早に急ク橋元の里ハ昔の橋の跡

*深草の少将—小野小町のもとに九十九夜
通ったが、もう一夜というところで果た
せなかつた悲恋の人。僧正遍昭ないし大
納言義平の子義宣かといわれるが不詳。
四位の少将。

*新井の宿—静岡県湖西市。新居宿・旧名
「荒井宿」。東海道五十三次の三十一番目
の宿場。

濱名の橋ハ名のミして、元白須賀や潮見坂、遠江の灘ハ七十五里、爰で潮見の觀世音、沖の目当ての常焼明、下れハ白須賀、元録（祿）の未の年に津浪して、爰に移すと白須賀の宿を過れば柏餅、猿が番場の是名代、大なれ、小なれ壺ツツ、しなびたばゝが売付ル、猿がばゝアの柏餅、もちかけられてももふいけぬ、モ一ツ二ツ三河の国、遠江との境川、一里山村化物塚、狸の得もの八疊敷、立テ岩山の鏡山、合セ鏡や二タ川の宿ハ、大岩・から沢と二ツ合して二タ川宿、越れハかち／＼火打坂にて、一ツ

*濱名の橋―奈良時代「新居郷」浜名湖浜名川の畔に猪鼻へのち新居町橋本）の駅家（うまや）が『続日本紀』に記されている。九世紀には浜名川の橋と橋本宿がその地に登場し、中世の『十六夜日記』『海道記』などの紀行文や往來の人々の和歌に残されているが、明応年間（1492〜1501）の大災害はこの地域の地形を一変してしまい、浜名川・橋本も消滅した。
*元禄十六年（1703）十一月、南関東大地震。

*猿が番場の柏餅―『東海道名所図会』に「猿馬場さるがババ」として「境川より東、左右原山にして小松多し、風景の地なり、北の方に大岩あり―中略―猿馬場の茶店に柏餅を名物とす」とある。

*二タ川の宿―愛知県豊橋市二川町。東海道五十三次の三十三番目の宿場。

ふくと吸付たばこ、中のよいしようと姥石打過テ
是より吉田領分也、左りに当りて岩屋観音有
二川の松原より見渡せば、高山の上ニ観世音立仏
にてまします也

ばせを

かすむ日や 海道いちの たち仏

我等先年、勢州発足節、たゞ並木よりふし拝ミ
右に高きハ石巻山、きりりと巻た繻子の帯
しかも鹿子のふり袖を、二階でまねく其宿の、ほんに
きりやうも吉田の宿、大花屋にこそ着にけり

* 岩屋観音―「名所図会」に「吉田より壱里半、東大岩村山間にあり、亀間山窟堂」と号し、禪宗・本尊千手観音。

* 高山の上に観世音立仏―右の図会に「堂後の大岩の岩頭に銅像の正観音を安ず、明和二年（1765）江戸谷中より寄進す、遠境より鮮やかにみゆる」とある。

* ばせを―この句、芭蕉句集・芭蕉文集にもなし。

* 吉田の宿―愛知県豊橋市。東海道三十四番目の宿場。

当所城主松平伊豆守荒井吉田橋の御関所御関所、伊豆守

殿より勤番す、七万石領せらるゝ、往昔九鬼大隅守喜隆(嘉隆)

石田治部少輔三成がほん逆にくみし、志州鳥羽の

城へ楯籠り、其子長門守ハ関東へ御味方として父子

引別れたり、時に長門守、父の討手を蒙り、此所の

売イ船、渡海馴レたるを計て数千騎勢を大船拾艘に

とり乗せ、順風に帆を上ケ、二十里の海上暫時に志州鳥

羽の城へ着陣し、不意に責寄せれば、城兵上を下へと

騒(騒動)とふし、たちまちに落城す、其後御託を申て父の

命を乞イ、高野山へ登らしむる、長門守が忠孝の全を

御感ある、此時の功によつて十九艘の舟主江売船の

*松平伊豆守—文政十二年(1829)当時は、松平信明へのぶあきら。文化三年(1806)〜十四年老中。(大河内松平氏)

*九鬼嘉隆(くきよしたか)—織田信長・豊臣秀吉に仕えて、水軍の将として戦功を上げ、鳥羽城に拠つて伊勢・志摩のうちで三万五千石を領した。

*その子長門守—嘉隆の子守隆、関が原の戦の後、伊勢国に二万石を加増され、五万五千石を領した。

荷物十九品の上ハマへを取ことを御免あり、馱場の諸
役を勤(つとめ)ず船役を勤(つとむ)ル、此船問屋ミな有徳なるものなり
吉田川本名豊川と言、水清く澄て流れる

豊川や 豊ゆたかにすめる 我(マ)に

乗心よき 船町の宿

昔ハ今の橋より三町程川上に渡し場ありて、白
菅の渡しといゝしとなり、大水に旅人(たびにん)ン毎度難義
するによつて、忝(かたじけなく)も橋を掛られ、今橋と言しが
其後今の所へ掛替りてより吉田橋といふとかや
橋の上より見ゆる吉田の城、高櫓を入道櫓と言、此櫓

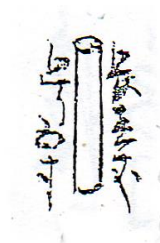
*有徳なるもの(うとくなるもの)――
有徳||徳行の勝れていること。
有徳人||富裕な人、金持ち。

の下を夜中に通船いたす時ハ、怪敷ことあると言伝ふ
 又船町を江戸の方へ過て神明の社あり、此門前を両側
 建テ続ク町家也、爰を嶋路と言、是をいかにと言に、夜に
 入ルと怪敷こと有ルゆへ、おして尋るに闇も月夜も違
 ことなしと言、領主もあやしまれ、博士に仰ふせて占
 しむれども、実事決し難かりしが、三十年程以前
 大水のとき、此辺一チ円に淵となり、漸く水落ぬ、其後
 一向に跡形もなくなりしと言、又城の内に天王の社あり
 六月十四日の夜ハ、城下の町札本町・伝馬町とて両町にて大花
 火を燈す、夜もすがら燈す、大造なること凡立物ハ建
 を十六丈程、広巾三間半程、かいどうのまん中に居おき
 たいまつを以て口火す、我等宿の亭主、くわしく聞しに

*城の内に天王の社—現吉田神社。『三河国
 二葉松』に渥美郡の神社の一つとして、
 「城内吉田天王社、社領三十石、神主石
 田式部」とある。又『和漢三才図会』に
 は「天王社、祭神持統天皇」とある。「名
 所図会」には「牛頭天王祠ゴツテンワウ
 ノヤシロ」とある。『三河藻塩草』はこれ
 を参考としたか。

其数多く候得共、中にも京清水ぎおんの瀧、三ンがい松
 其外いろ／＼物語れども是にしるさず、実(けじ)も他国に
 異ナリ、目をおどろかす計りなるよし物語りけり、其外
 亭主いふに、我まへに玉火とて(下段の図)此様なる竹の筒へ
 ゑ(煙硝)ンセうを仕込打出スこと、あだかも星のことし、余日
 決而なし、此兩日に限ルと言、此火の中を笹おとしとて四
 方へ竹をさゝけ、中にておどること、家ことなる、古今珍
 敷所の古風なるよし物語りけり、吉田橋、長サ百弍拾間
 といへども、京間九十間余あり、むかしハ今橋といふしと也
 川の名を豊川と言、橋宿の方、握(渥美)み郡今橋の庄、向
(宝飯)實飯郡下地村右の方に、正源寺といふ寺あり、地領寺五百石
 と承り 神君此寺に御楯籠り、吉田の城をせめられし

長 壺丈



廻り 五寸

*正源寺—聖眼寺。豊橋市下地町、聖霊山
 という。真宗高田派、もと吉祥山の麓に
 あった天台宗寺院。三河高田派三ヶ寺の
 一つ。永祿七年(1564)に松平氏の本陣
 が置かれた。

と也、幾日せめられ候与いへども、落城におよびがたく、神君
 此寺の聖徳大師へ御きせいをかけられ、其夜の御夢に
 白髪たる老人、扇子弍本を 神君へ参らせ、此扇子
 を馬印にして今一度城責したまわバ、忽ち落城可致と
 御覧じ、御ゆめハ覚けると也、弍本の扇子、御しん所（寢所）に有之
（奇異）きいの事に思召、早々御馬印に被為成、御責ありけるに、はた
 して落城す、かるが故、聖徳大師への御朱印地と申与かや
 我等先年勢州発足の節、此正源寺へ参詣し、ことくく
 宝物拝見す、御扇子壺本ハ此寺に納メ有ル、壺本ハ武州
 の御居城に有ルとかや、其外、いろく御楯籠りの節の御器
 物なぞもあり、此寺に翁の塚あり

* 聖徳大師—聖徳太子のことか。
 * 御きせい—御祈誓か。神仏に誓いを立て
 てその加護を祈ること。立願。

* かるが故（かるがゆえに）—「か（斯）
 あるがゆえに」の変化したもの。先行の
 事柄の当然の結果として、後行の事柄が
 起こることを示す。こういうわけで、そ
 れゆえに。

ばせを

松ご葉を 焚^{たい}て手ぬくい あぶる寒さかな

此辺の誹^{（俳）}人、此所へ碑を建、筆跡、尾陽の隠士とある

翁^{（行脚あんぎや）}新脚の時、此所にての句なりとこそ、先見聞の所ハ
あらましこゝに記ス

けふは九月五日なり、天気も吉田と、立出て
良香散の立場にて一ツぷく呑めバ、気をはらし
二ふくまいれバ徳若き、御万歳の住所印南村
といふとかや、国府明神をふし拝ミ、右に石碑ヲ

*ばせをの句―芭蕉句集に
吉田の内、下地にて
松葉を焼て手拭あぶる寒さ哉
とある。
「松葉」を「こ」と詠む。枯松葉のこと。
松葉の枯れ落ちたのを焚物にする場合に
多く言う。

建たるハ、鳳来寺への参詣道、暫ク行ケハ本坂也、越へ
 陰寺を過て御油の宿、五井と書しハ昔のこと、今ハ
 お油とろりと付ケ、髪も形も御油されさつても
 塗ツたり、うどんの粉、中に頬べた赤坂の宿を越
 れバ宮路山、いにしへ、持統天皇の御幸ならせ給ふと
 ぞ、又頼朝の上洛に宮道の山に止宿とかや、打越行ケ
 バ宝蔵寺、此辺の山々を二村山といふとかや、宝蔵
 其外宝物多く有ル、門前に御手つから植給ひし松の
 木あり、此辺荒縄編貫ざし、取縄名物也、是を宝蔵
 寺縄といふ、爰ハ元宿、三河国西と東の境也、此辺の山より
 雲母出ル、出るハ／＼又出た嶋かならぬか鬢びんさゝら、
 □□(唄声カ)

*御油の宿―豊川市御油町。東海道三十五番目の宿場。

*持統天皇の御幸―大宝二年(702)十月、三河行幸の際、御馬湊から上陸して宮路山を越え、国府付近の行宮へ行かれた。ちなみにこのとき持統は退位して上皇となっていた。

*頼朝の上洛に―上洛の帰途に宮路山を通ったという。
 *宝蔵寺―二村山、浄土宗。家康が幼い時、ここで学問をしたという。

*門前の松―「名所図会」に「又門前に大木の古松あり・・・家康が御愛樹といふ」とある。

*鬢さゝら―民俗芸能の打楽器の一つ。短冊形の薄い板を数十枚重ねてその上端をひもでつづり合わせたもの。両端の板を両手で持ち、打ち合わせて音を出す。

勸進比(比丘尼カ)に、かんじんかなめハ麦はたけ、ころ／＼ころ

ばる丸太舟、藤川の宿かんは崎、大平橋にさしかゝる

名に大屋川、是ならん、西に当りて小豆坂、天文十一秋

の頃、今川義元、織田信秀と合戦ありし所也、七本鎗

も此所、鑊を洗し池もあり、程なく是より岡崎領

旅宿の亭主の出迎も見かけて欠の郷(こふ おくりなさけ)、投情けのよい

女郎衆、岡崎の宿にハ伝馬町、恋の重(おも)モ荷(に)を背覆(せおふ)ふ

たか、連尺町(れんじやく)の棟高(むね)く、城の大手ハ左りの方、櫓ハ四十八

櫓、城主本多中務小輔殿、五万石を領せらる、先祖は

名におふ平八郎、唐の頭(かしら)に立並ふ武勇はげしき

*藤川の宿―岡崎市藤川町。東海道三十六番目の宿場。

*大屋川―「名所図会」に「岡崎より三十町許り東にあり、一名男川また大平河ともいふ、三河三大河の其一つ也、春夏の頃ハ小鮎多く石に触れて瀬々をのぶる。此辺の奇観なり」とある。
*小豆坂―天文十一年(1542)の戦い。七本槍―朝比奈小三郎・津田孫三郎信光・織田造酒允信房・下方弥三郎国範・岡田助右衛門直教・佐々隼人佐勝通・同孫介勝豊

*岡崎の宿―愛知県岡崎市。東海道三十七番目の宿場。

*唐の頭―外来の「やく」ほう牛の尾をたばねて頭部の飾りとしたもの、多くは兜の飾りとした。

勤臣達、異儀糺しけに出向ひ、最早旅宿も程近し

*異儀糺しげに―威儀正しげに

といさめる駒に鞍くらをあて、追や十町八町村、これ岡
崎の町の数、五十四町と聞からに、扱も長いと矢作の
橋、日本無双の大橋なりと聞ク

此矢作橋、長サ二百八間と道中記にあれども、京間

百五拾二間余、矢作川・豊川・大屋川、此三ツの大河ある故

三河といふと也、橋の上より見渡せば、堤の松の稜振りも

よく、川水澄て浅く流レ、幾瀬か砂子の雲の引ケ

川上ミハ九キ中村衣の里、川下モハ西尾平イ坂柴船ニ

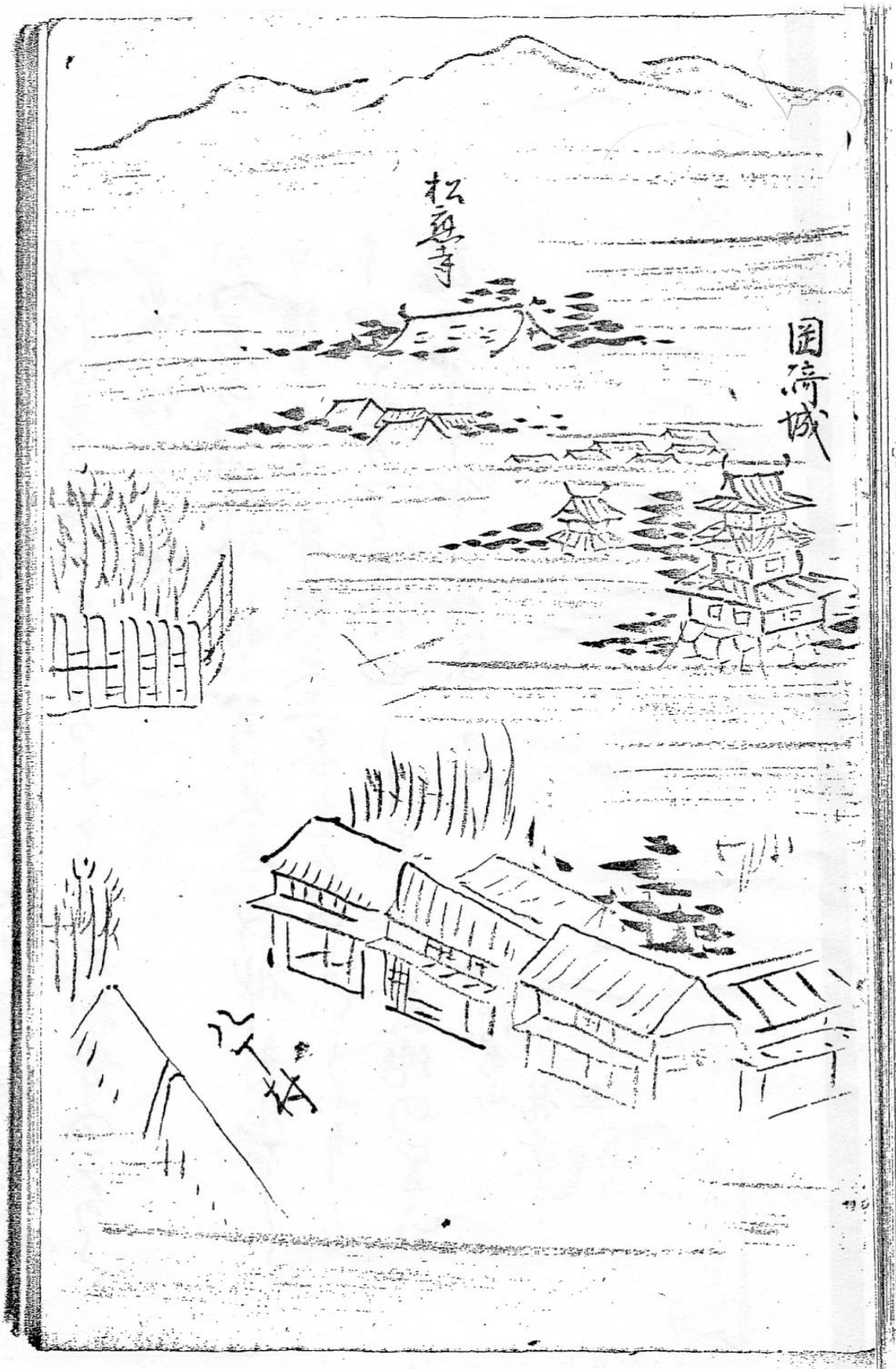
帆を上ケて、入り江出嶋に、見へつ隠れつ霞たな引ク
 高櫓、岡崎の城東に、高く（しゃちほこ）鱸 天にひれふりてこそ
 行松の松應寺、木の間にもるゝ大樹寺のこなた
 の森ハ伊賀八幡、是

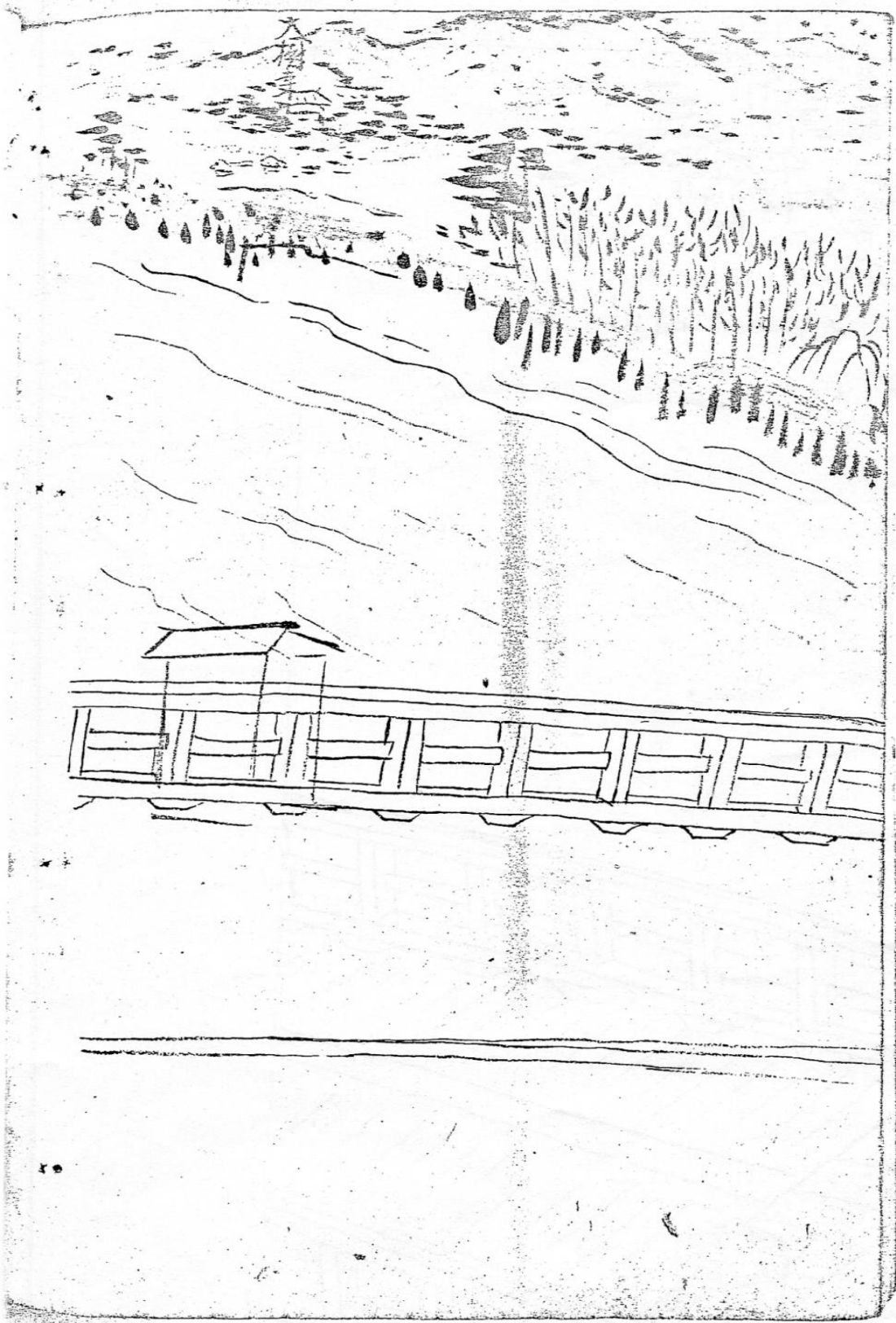
神君の御氏神、殊にハ弓矢応ごの神、矢作ばし
 守護し給ふハ牛頭天王、各首尾のよいよふに
 はやさせ給へと堤の西、ふし拝ミツ、矢作の里の
 旅宿にこそハ着にけり

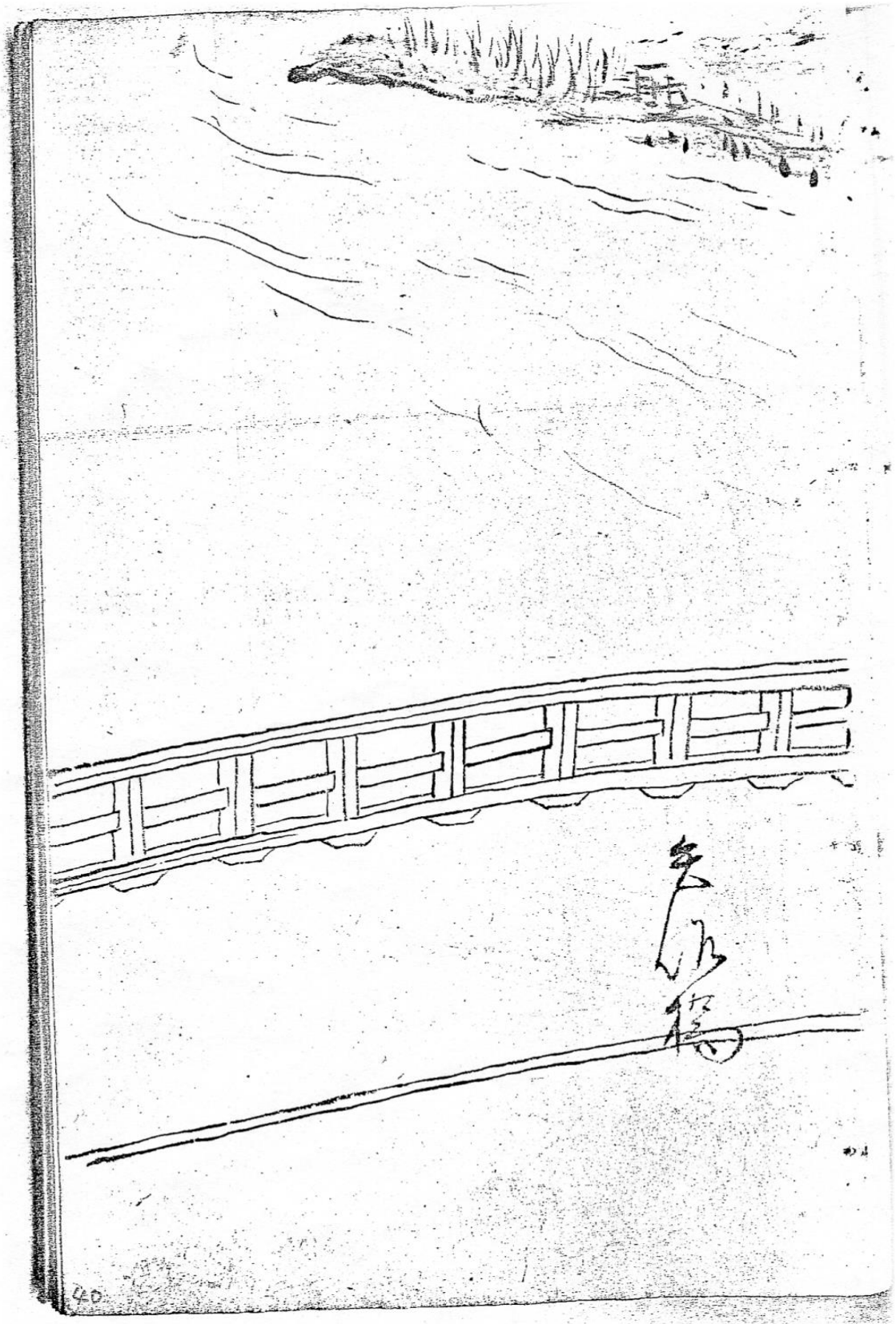


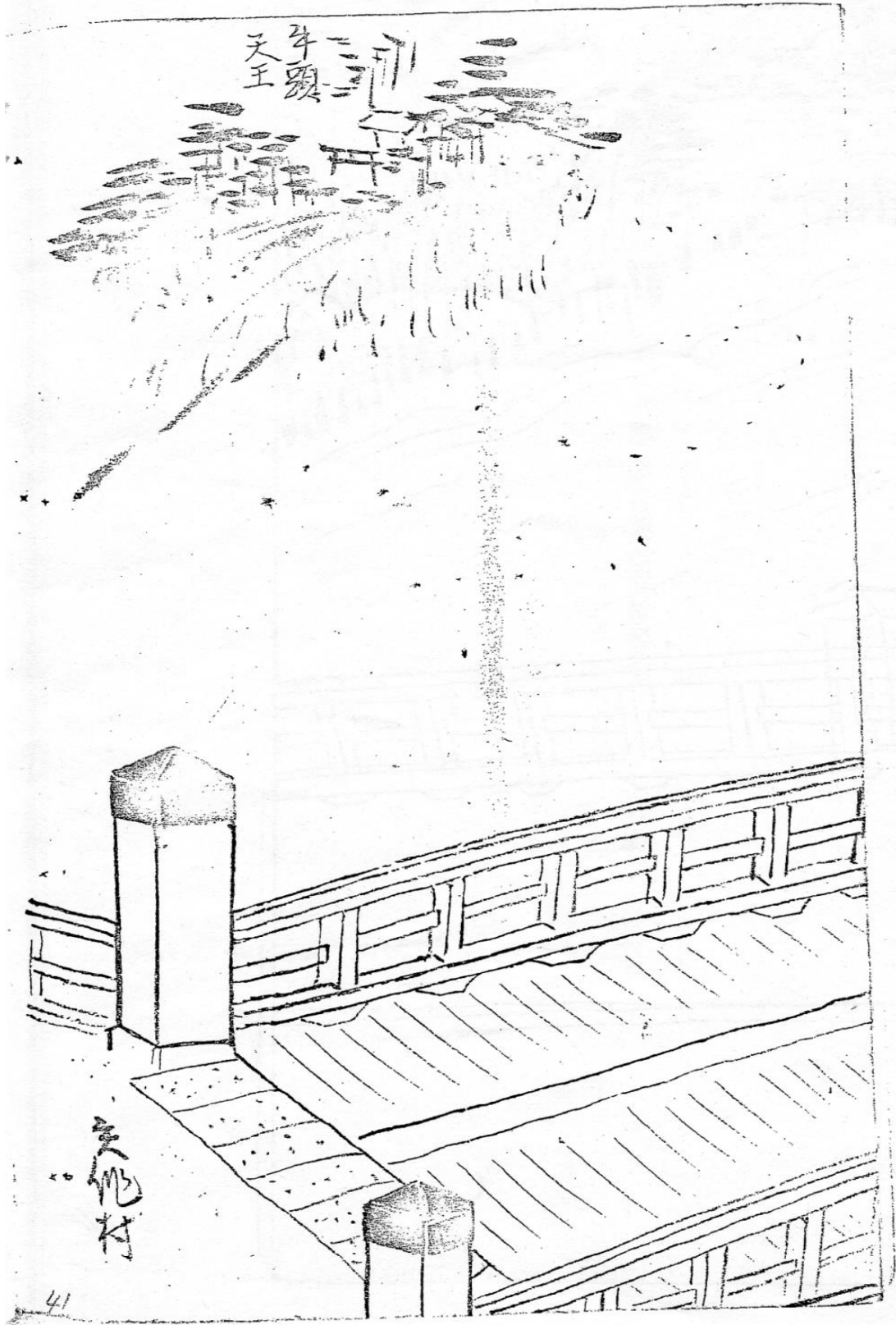
河原山
 勝蓮寺
 正
 式部卿
 重ノ

*牛頭天王—矢作神社のこと。
 祭神 素盞鳴尊 豊受大神
 古くは牛頭天王といった。









岡崎ハ 神君御在城なりしゆへ、当国の神社仏客(關)
 御由緒有て御朱印を贈ふ(賜)、大名小名御譜代の面々多クハ
 本国也、此度ハ寸暇カも得かたく在勤なりしか、寸暇ある日見聞
 西三河の名所・旧跡ヲあらし爰に記ス、城下より比(北)に伊賀
 八幡、社領五百石、是則すなはち御氏神也、松應寺、百石 廣忠公の
 御廟、御玉垣の内に松の大樹有り、松平の栄イを御誓ひあつて
 植させ給ふ、東江枝ふりて大木となる、此故に松應寺と申
 大樹寺ハ 廣忠公の御建立、寺領七百石、甲州の武田と御戦へ
 の時、御太刀を以伐(きら)せ給ふ門(かんぬき)の門そ、素道坊が敵をあざむきし
 釣鐘、其外宝物数多あり、伊田坂ハ兩度の戦場、常念仏
 堂千人の首塚に石碑あり、是ハ翁ばセふの句

*神君—徳川家康。死後東照権現として神にまつられる。

*御太刀を以て伐せ給ふ門—永禄三年五月の戦いの時、今川方として大高の城より大樹寺に入り、敵(織田方)の寺門に迫り来るとき、家康がにて門の門を切りつけたという。今にこの門は神として祀られている。

夏草や 兵ツハものどもの ゆめのあと

翁、陸奥行脚の句也と人のいゝし、此所より見れば
畠の中に酒井左衛門佐討死の墓有り、岩津信光明寺
信光公の御廟あり、寺領百石、瀧山寺、寺領八百石、麓に
瀧水なめらかにして水清く、当国一の景地也、松平村
光月院、寺領百石、松平太郎左衛門五百石、御由緒世の人知る
所也、南ハ菅生の川を隔、此辺昔の海道とかや、六所明神
社領百石、龍海院いん、寺領百石、御代の始りの御夢に、是と言
文字を御らんじ給ひ、此寺の住僧を召し給ひて占せら
るゝに、日の下の人とはんじて、御吉瑞を言上す、御よろこび
斜ならず、御帰依遊キズイされしと也、されバ此寺を是の字

*信光公―松平氏三代で、十八松平の祖。

*松平太郎左衛門由緒―十六世紀の有力国
人領主で徳川家康の祖先である松平氏の
発祥譚がしるされている書。

*光月院―現松平村高月院

*御代の始りの夢―松平清康（家康の祖父）
がみた夢の話。

寺といふ、佐崎浄空寺・野寺・針崎、一ツ向宗乱ありし所也、其
外名所古跡算(かぞ)ふるに暇あらず、矢作ハ往昔、日本武尊
東夷征伐の時、此所ニ滞陳(陣)まし／＼て多くの矢を作らせ
らる故に、矢を矧とも又矢を作るとも書、又中昔矢作
に兼高と言長者ありしとなり、岡崎領分西の境、善知(うと)
鳥(う)の野中に竹藪あり、是を長者の藪なりと言伝ふ、北に
岩津村と言所に、長者の味噌粕石といふて、大キなる岩あり
是を長者の台所の跡なりと言、其間二里に余る一チ円に長
者の屋敷跡なるか、実偽定かならず、又岡崎の宿中とも言
其ゆへをいかにと言に、長者夫婦、子なきことを愁(なげ)て鳳来
寺峯の薬師へ宿願して、一ト人りの娘をもふけ、浄瑠璃姫

*一向宗乱—永禄六年(1563)家康家臣を
巻き込んだ一向宗門徒と家康との戦い。

*善知鳥—うとう、現岡崎市宇頭町。

と号、成長なして心さまやさしく、月雪花を友とし
其かたちあてやかなれば、殊ニ二タ親のてう愛イかぎりなく、数多
妓芸の女を集めて仕はしむ、十五夜十六夜冷泉なんと
言都(みやこはずかしき)恥敷粧ひ、弾唄ふ声のつやゝかさ、又天人も雲の
絶間を三下り、菩薩も爰に影向顔し給ひ、五色の雲ハ二上り
にたな引キ、釈シヤ加(迦)も阿弥陀もうわにならせ給ふかと疑ふ
其頃、源牛若丸、奥州下向、金売り吉次を伴トムナひ、此矢作の
長者が元に止宿有り、此姫に契りをこめ、頓(やが)て分かれて奥州江
おもむく、姫、深くも恋れて菅生の淵へ身を投げるとかや
あわれはかなき名を止、長者夫婦悲しみの余り、せめてハ一チ蓮

侘^(托)生と、牛若丸・姫の像を造り、一チ宇の寺を建立し、矢作の出はづれに十王堂とて、松原の取付にあり、又爰に不思儀なることあり、三十年程已前、矢作にすむ又右衛門とて貧しき百性^(姓)あり、生得正路にして孝心深きもの也しが、ある時二タ親の嚙に、我いへに井のなきことこそ不自由あり、しかれども朝夕の煙さへ立ちかぬれば、心にまかせずとあれば、又右衛門それハ心安きこと也、地低なれば我等壺人にて堀^(堀)とも二日ハ過ぎじとて少しき屋敷の内をあちこちと場所を見立テ堀^(堀)けるに、段々堀^(堀)下けても水出ス、何か音して鍬の当たるを堀^(堀)起しみれハ錢なり、夫より錢の出る事限りなし、早速に地頭所へ申上ければ

*生得正路―生まれつき正直なこと

領主役人来りて見分あるに、永楽錢より已来いらいののカ
錢ハなし、皆さま／＼の古錢也、其中に珍敷錢をバ地頭へ
さし上ケ、又地頭より上江（献）もけんず、其余は主の物なるべし、と
下知ありければ、聞伝へ／＼所望するもの一錢の価二
錢三錢或ハ五錢十錢に替へ、忽ち金錢くらにミち夥敷
田地を求、家富栄へる、又右衛門ハ其後身まかり、その子
惣助と云て今に栄へあるといふ、以誠（まことにもつて）にまれなることども也
是孝心の身に集ル事、天道是を知り給ふ栄なるべし、此井
今にいか程のひでりにも乾ことなしと言、しかれば爰が長者
の跡なるか不知